
銀河迷雄伝説

浜フィル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河迷雄伝説

【Nコード】

N0169Y

【作者名】

浜ファイル

【あらすじ】

日本人初のプロバスケットボールNBAのドラフトを待つばかりの大学生の俺はもうすぐ金、名声、女、何でもかんでも手に入る予定だった！しかし気がつけば転生してあの銀河英雄伝説の世界に入り込んでしまった。しかもあの超KY貴族の次男として！どうなるのよ！俺！・・・この話はらいとすたっふ2004るーるを遵守しております。また、多くの方々の二次小説を参考にさせていただいております。温かい目で見守っていただけると幸いです。初執筆なので色々教えていただけるとうれしいです。

第一話…プロローグ

第一話…プロローグ

パァーン!!

耳を劈く大音量の電子ホーンが試合の終わりを告げた。

それでもここマジソンスクエアガーデンの観客の声援に最後まで聞き取れなかった。

ゲーム終了。俺達は負けたんだ……

NCAA全米大学バスケットボール選手権決勝戦【ザ・ファイナル】だった。

コネチカット大学 対 デューク大学 8点差で俺達デューク大学は負けた……俺の大学生活最後の試合は幕を閉じた。スタッツは21得点11アシスト10リバウンドこれは【トリプル・ダブル】というやつだ。

俺の名前は速水純一20歳。身長196?で体重88?の日本人だがバスケットボールの夢をつかみにアメリカの大学に進学した。目的はもちろん大学バスケットで活躍して頂点であるプロバスケットのNBAに行くことだ。

激しい生存競争の中、ついに念願のプロバスケットNBAのドラフト候補として名前が広まり騒がれた。しかもただのドラフト候補じゃないぜ、一巡目指名っていうトップ中のトップの扱いだ。

現在はデューク大学の3年生だが、アーリーエントリーという勉強嫌いな奴には魅力的な制度があるので今年のドラフトで指名を受けられるわけだ。

金、名声、ありとあらゆる賞賛が俺の周りを跳ね回っている。これからの俺の人生は変わる。俺が自分で勝ち取ったんだ。俺が勝者なんだ。これからはプロバスケットボールの世界でも申し上がってやるぜ。

今だってみんなには悪いが金も女も不自由なんかしたことは無いぜ。しょっちゅうパーティーやって、イカすギャルをそれこそつかえひっかえだ。

今日もさっさとホテルの戻って楽しむつもりだ。ドラフト会議は1ヶ月後だからそれまではどのみち練習もできないし、それまではのんびりだな。ロングバケーションにして南のリゾートにでも行ってくるか。なにしろこれから暫くは自由の身だから。

ホテルに戻った俺は軽くシャワーを浴びて、イカすギャルを呼ぶ前に軽くチームメイトからもらったドラッグを決めとくことにした。副作用は無く常習性もなく、ドーピングチェックにも引つかからない。便利なヤクだよなこのモーニングスターってヤクは・・・何だか少し眠くなってきた。ちょっと、サクッと寝とくか、その後は激しく楽しいラウンドが待っているわけだからさ・・・ぐう、ぐう、・・・

「おお！お生まれになったぞ！」「やった！男の子だ！帝国万歳！」
「本当か！余に弟ができたのか！」・・・な、なんだ・・・周りがうるせえ！静かにしやがれ！俺が眠ってんだぞ！まだ眠いのに！ぎけんな！「おお！おお！元気な泣き声だ」・・・何？俺の声が鳴き声？何言ってやがる！うるせえんだよ！この俺に何か文句でもある

のか！あれ？おかしいな？体が何だか思うように動かないぜ！どうなってんだこりゃ？

頭が混乱してたが、落ち着いて周りを見ると・・・何だか変な服着たやつらが大量いて、何だこいつら？お前ら何なんだよ！ってよく聞けば俺の言葉は・・・言葉じゃねえ！どうなっちまったんだ俺？誰か助けてくれ、警備員をよこせ！あれ、やっぱ言葉にならないじゃんか！泣き声だ！何でしゃべれないんだ！どうなってんだ？ここはどこだ？誰なんだお前らは！何？ランズベルク家？何のことだ？待てよ・・・ランズベルク家って・・・あのランズベルク家かよ、あの銀河英雄伝説に出てくるあのランズベルク家なのかよ！

落ち着け、落ち着けこの俺ともあろうものが・・・よくよく見てみると大分わかってきた。理由はわからない。誰の仕業かもわからないが、どうやらここは銀河帝国の貴族のひとつであるランズベルク家であり、俺は次男として生まれてきたらしい・・・銀河帝国ってあの銀河英雄伝説に出てくるあの銀河帝国だぜ！しかもよお、俺の長男はあの！ノー天気男のアルフレッドだぜ！？

アルフレッド・フォン・ランズベルク

有益ではないが、害のない無邪気な人物。かつては貴族のサロンで害のない詩などを書き散らしていた。エルウィン・ヨーゼフ誘拐に関わってからは、かせにその忠誠と情熱を捧げたが、報われることなく終わったようである・・・とウィキペディアには書いてある！

どうやら俺は転生して銀河英雄伝説の話の中に来てしまったみたいだ。だが、そもそも俺は原作をノベルズ、文庫と買いなおし、限定DVDBOXを持っているほどの銀英伝フリークでもあるので、何か複雑な感覚である・・・

ちょっと待ってくれ。そんじゃあ、俺の金は？女は？夢なら覚めてくれ！やっぱスーパースターの俺がいい！誰か助けてくれえ！しかも赤ん坊で生まれたのでみんなが気持ち悪い笑顔で顔を摺り寄せてきやがる！やめろ！気持ち悪いんだよ！

おまけにあの馬鹿兄アルフレッドは「余もこれからは弟に恥ずべき事の無いように気持ちも新たに帝国文学の探求を進めるつもりだ」もう、しぬれ！「貴族の尊さと偉大さを弟に教えていかなければ」とか、何だか与太話が聞こえてきたぞ！寒気がする！ガクガク！ブルブル！

何日か何週間か経ち、最近の、「まあ、いつかは戻れんべ」というか暢気と言うか、所詮はランズベルク家は大貴族なわけで食うに困らないのである。それにしてもそれなりの待遇で生きてきた俺から見ても「スゲエ！」「何考えてんだ？」って感じの生活というか毎日がお祭りみたいなもんで、毎週の木金土日は自宅庭園でパーティーだぜ？

中には結構かわいい顔した貴族のお坊ちやま、お嬢ちやまが紛れ込んでいるので、それなりに赤ん坊をやっているも色々と構って貰えるので楽しい。暫くの間はこんな現実離れた生活に身を置くのもいいかも、って感じてる。

そのまま戻れないまま、貴族として俺は8歳になった・・・無能だが領民には極めて温厚な市政を行っている父親とこれまた極め付きの世間知らずだが善人の母に育てられてきた。兄のアルフレッドの馬鹿っぷりは相変わらずで、正直何を考えているのかはわからない。

貴族幼年学校では上級生なのに後輩からいじめに合っているような

ので、こっちはストリートファイトで慣らしたバトルで何度か救ってやったりした。その度に「兄に対するその配慮、感極まる」「これからも兄弟二人手を取り合って共に進もうではないか」……って弱いのはお前だけだろ？

幼年学校に入学した俺は、ミニフライングボールチームに所属した。もともと居た俺の世界ではミニバスケットボールみたいなやつね。重力を軽く設定した空間でハンドボールとバスケットボールの中間みたいなルールで行われるスポーツである。

まあ、何と言うかプロバスケットのドラフト候補だった俺はこの程度のスポーツは片手間だよ。敵無しだよ。一瞬でチームのエースだし、地区の選拔選手にもなってしまった。大人のフライングボールでも見たこと無いようなスカイプレーを連発する俺は幼年学校の、ランズベルク家の誇りだった。

ちなみに馬鹿兄のアルフレッドは運動神経マイナス100億光年！位の駄目さだった。試合が終わるといつも「よくぞ！これこそ我々兄弟の誇るべき手柄である」ってさあ……ほんとに頭悪いだろ！かなりの酷いレベルで！

頭脳明晰、運動神経抜群ともなれば当然校内のスターになるのは簡単だった。ただし一学年上に金髪&赤毛のスーパコンビがいたの
で、よく比較はされたけどね。金髪の方はリアル！ラインハルトフ
オンミューゼルだった。マジかけー！「君が最近噂されているス
ーパーボーイなのか？」「兄上の方は何だかよくわからないが大し
たものだ」「貴族の中にもまだまだ凄い人物はいるんだな」と先輩
風ぴゅーぴゅー吹かせて去っていった。

それ以降は妙に気が合うのか、別の思惑があるのか、三人で結構遊

んだりした。パツキンラインハルトのお姉さんにも何度か合った。生アンネローゼは気が狂うほどの美女だった。

こりゃ皇帝も欲しがるわな・・・ホットチョコレートはとても美味かった！さすがに「アルフォンス、弟と仲良くしてあげてね・・・」とは言われなかったけど。

ラインハルトの方は時折、試すかのようにドキリ！とする話をしてくる。その時の隣で聞いているキルヒアイスの顔は尋常ではなかったが。しかし「ルドルフにできて余にできないとは思わない」的な話は原作通りで感動していると「どうした！アルフォンス、臆したか」・・・

説明しなかったが俺の名前はアルフォンスという。アルフォンス・フォン・ランズベルクだ！どうだい？馬鹿兄よりは頭良さそうだろう？

最初の転機は訪れた。クロプシュトック家領内で発生した大規模暴動に端を発し、周辺星域領内で暴動が拡大した時期があった。当然近隣に位置しているランズベルク家にも暴動が起きかけた。何しろ父親は領主でありながら無能でお人よしときているので、暴動の鎮圧どころではなかった。

当然鎮圧部隊の指揮は馬鹿兄のアルフレッドが当たったが・・・わかるよね。火にニトログリセリンいやいや、火にゼッフル粒子なくらいに暴動が激しく広がってしまった。

（仕方ねえな。こう見えてもデューク大学経営学部出身だし、将来は起業も考えていたし、少し助けてやるか・・・）

ということで、暴動の原因は何かということを調査したのである。

ももとのクロプシュトック家の暴動は不正な裁判が原因のものであったが、ここランズベルク領ではそんな原因は無く、日々の不満が爆発した・・・そんな感じの調査結果だった。なーんだ、それならば領地政策を抜本的に見直せば済むことじゃないか、ということとを父親と馬鹿兄のアルフレッドに説明した。

内容はこうである。現在のランズベルク領内の租税割合は6割ランズベルク家で4割を領民の取分とする分配方式である。しかもその中から各種税金を追加で徴収している状態である。

この部分を大幅に変更するのだ。4割をランズベルク家、6割を領民の取分とする。しかも徴収した4割の半分をランズベルク家の収入とし、残る半分以上を全部領民の福利厚生に充てることにした・・・ね！大きな改革でしょう？しかも福利厚生、医療と教育の充実に大きく割り振ったのである。人はパンのみに生きるにあらず！父親も馬鹿兄も猛反対だったが、10のうちの取分を6割から4割に減少するという発想がそもそも馬鹿なのであって、今後は100のうちの40を手に入れるための政策を行うべきであると主張した。

そんな話は聞いた事が無いとか、前例が無いとか渋っていたが、誰もやっていないからこそ我がランズベルク家が真つ先に手を付けるんだ！そこにこそ意義があるんだ！説得し、実行した。

ここで俺の経営戦略部分でもアドバンテージを稼いでおくことがランズベルク家1000年の計であると説明したのが効いたみたい。

馬鹿兄アルフレッドはまたも「感動した！弟の知力は一艦隊にも及ぶ」・・・あれ、その話もどっかで聞いた気が・・・

領民の反応を知りたい？

決まってるでしょ？大喜びですよ。

みんな笑顔でファイヤードダンスしまつくていたし・・・領土を守るための私兵についても今回は整備した。近代化を一気に推し進めて人員を大幅に削減した。その結果は労働人口の増加になり租税の金額ベースではそれほど大きい減収とはならず済んだ。

これからは領民も領主もいっしょにハッピーにならないとね。しかもこういうわけかランズベルク領内は希金属（レアメタル、レアアース）が豊富に産出できるのよ。携帯電話や長距離高速通信の機械には必須の原料なので取引価格が安定して流通できているのである。

ここで少し銀河帝国の携帯電話の事情を説明しよう。現在はネオ・ノキアスという会社がトップシェアである。次いでマリクソン社が追う。離れて大華通信公司、I T & a m p ; K D D I、とかが続いている。この殆どがランズベルク家の希金属を使っているのである。どこかの国のように、ここで一発生産量を引き締めちゃうか？

知れば知るほどにこのランズベルク家の経済環境は超一流の土壤だったのである。一応経済顧問はいるが、コトラーやポーターの戦略論すら読んでいないらしい。

それなら近いうちに俺が自ら回していくか・・・ちなみに資産運用は株式や金、債券などの現物投資ではなく、幅広く株式、債券、金、先物デリバティブ、投信などをバランスで集めたC D Sで運用している。
クレジットデフォルトスワップ

ヘッジを高く設定しているため、大きく利益は出ないが、致命的な損失もカバーできるので無能な・・・いえいえ多忙なランズベルク家の方々には一番ですよ、と資産運用会社の担当から言われているみたい。やっぱ馬鹿貴族だね。

貴族のランクで考えるとランズベルク家はBランクの規模なんだけど（ちなみにSランクは例のブラウンシュバイク家やリッテンハイム家を筆頭に5〜6家）Aランクは惑星を3つくらい所有している貴族達で総資産は数十兆帝国マルクを所持しているといわれている。

まあ、世紀末の東アジアの島国くらいの規模だと思えばいいかも・・・この規模で20〜30家くらいいるかな？ちなみに我がランズベルク家は一応3つの惑星を持っているが人口が少なく、何となくBランクなんだけど、先出の通り、レアメタルだレアアースだのがわんさか出てくるのでその総資産規模はAランクの上位に匹敵するものである！ああ、楽しいなスーパー金持ちって・・・

そんな超恵まれたアルフォンス フォン ランズベルクだが更なる転機がやってきた。それは、真夏の祭典、ノイエサンスーシで行われるノイエ耐久48時間レースである・・・

第二話…王宮杯争奪耐久レース

第二話…王宮杯争奪耐久レース（ノイエ・エンデューロ・グランプリ）

帝都オーデインには正直、そんなに行った事はないのだ。幼年学校初等科なのでそもそも機会が無かった。これが中等科ともなれば卒業体験実習という名目でオーデインへ、そしてノイエサンスーシにも行けるわけだけど・・・

今回は王宮杯争奪48時間耐久レースに参加するためにまだまだ灼熱の日差しを照りつける帝都オーデインにきたわけだ。

最初はなんのこっちゃ？と思ってエントリ用紙なんかシュレツダーにいれようと思ったけど・・・まてよ！参加予定リストに聞いたことのある名前がぎっしりジャマイカ！

原作に登場するやつだけでも、金髪、赤毛コンビとアルトリンゲン、ブラウヒッチ、ファアレンハイト、ビットェンフェルト、バイエルライン・・・ライナー・ブルームハルト！

・・・ブルームハルトって同盟軍のあの【薔薇の騎士連隊】ローゼンリッターにいるんじゃないの？（未だ亡命前のようだ）うーん、この辺りの連中とは繋がりを持っていたほうがよさそうだ・・・

ルールは単純明快、48時間の中で生き残っていれば良いわけである。

マシンはワルキューレを使用する。

高度3000メートルでリミッターを効かせて空中パイロンをひたすらグルグル回るだけである。

ただしワルキューレである以上、爆発しない程度にスペックダウンさせたレーザー、貫通力の弱い実体弾の使用は最低限の範囲で許されているのだ。

攻撃ができてしまうのがこのレースのポイントというか醍醐味というかエキサイティングなところである。

エンジンも1200馬力にリミットされていて非常に遅い！しかし上記ルールを守ればチューニングはOKなのである。

パイロットは1チーム3人まで。怪我や具合が悪くなっても残った人数で戦うサバイバルマッチである。

今回の俺のパイロット仲間はグレッグ・ドレイリングとザビエル・マクダニエル・・・何だか濁点が多い名前な奴らだ。

グレッグは白人の北欧系種族でザビエルはバリバリの黒人である。ともに自信たっぷりで年下の俺に向かって偉そうに話しかけてくるね。「びびってんじゃねえのか」とか「俺たちの足を引っ張るんじゃないえ」とかお前らレースが終わったら皆殺しだからな！

発進順位を決める予選がもうじき始まる・・・俺は載らずに見てるだけである。

予選にはグレッグがチャレンジするらしい。
まあ、どうでも良いよ、おぼっちゃま君達さ・・・参加機数を見てたまげた！480機！完走率は6%ないらしい・・・30機も残らな

いの!! なかなかおぼっちま達にしてはエグい競技ですこと・・・
金髪赤毛チームは予選はキルヒアイスか! 何か速そうだな。

我々のワルキューレはエンジンがアーマーライン社のメタルライン
Ver. 7である。

もともと中高速域重視モデルであるところにさらに最高速の伸びを
捨てて加速を限界まで引っ張ったドッグファイト用にチューンして
いる。

はつきり言って空中戦使用である。俺は今回、優勝を狙っている。
そうすれば空戦能力を買われて飛び級で士官学校にいける可能性が
あるからだ。

この後の歴史が史実通りであるなら、ラインハルトとキルヒアイス
にアドバンテージを持っていて先回りしたほうが良さそうなので、
一気に駆け抜けてやろうと考えているわけだ。

予選の結果は散々だった。

他の機体に何度もヒットしてしまい、ペナルティ（ヒットする度に
ペナルティポイントが加算され、順位が交代してしまう）で何と2
15番目という超ど真ん中でやんの!

こういうレースの基本は自分の前に成るべく他人を並ばせないこと
である・・・

これではスタート時の渋滞や多重クラッシュがあったときには逃げ
られない!

グレッグはそれでも強がっていたが「お前じゃもつと順位が下がっ
ている」とか「思ったよりも今回はレベルが高い」とかどうでもい
いことばかり喋りやがって。

ただ、時折見せる鋭い加速は、こっちの狙い通りだから、明日は俺のパートでせいぜい目だってやるさ。お前らこそ俺の足を引っ張るなよ！ってんだ！

当日のノイエサンスーシの天気は曇り、時折雨らしい。

OKだ！雨になれば視界が遮られる分、全ての機体が同じ条件になるからである。

まともにレースすれば、空力もパワーもエリート貴族が良いに決まってるんだから、しかも絶対あいつら違法チューンしてるよ、エンジン音が違いすぎる。

エンジン内部のマッスルシリンダーの音が異様に低い、恐らく我々のような同時爆発エンジンではなく異層爆発タイプのもんだろう。

低速から高速までの加速とトップスピードに乗っかる時間が理論上は大幅に短縮できると言われている。20世紀後半のモータースポーツでは当たり前なんですが・・・と勝手に思っているのである。

スタートは地面でエンジンストップ状態でパイロットがダッシュしてコクピットに飛び込んでイグニッションスタートとなるわけだ・
・

耐久レースの血はこんなところにも受け継がれているのか・・・最初のパートはザビエル・マクダニエルが担当し、予定では3時間半飛び回って来る予定だ。頼むぜザビアー！

「オン・ユア・マーク！」位置について！ってこと。

「セット、レディ！」

バーン！

とスタートの号砲がなり、ノイエ耐久48時間がスタートした。

パイロットスーツがうじゃうじゃいるからどこがどうなっているのか判らない！

一斉にイグニッションから急上昇するワルキューレの群れは壮観な眺めである。一周してこないと順位表示はされない。待つしかない。
・凡そ一周は6分台で帰ってくると予想している。恐らくラストの2時間からはスプリント状態である。5分後半に入ってくると思われる。

・そんな事を考えているうちに先頭集団が1周目のカウンターを刻みに来た！速い！

信じられない6分08秒だって・・・いきなりスプリント状態かよ！

じりじり、イライラ、何なんだ、オイ！6分50秒、52秒・・・

7分！未だ来ない！

ザビアーは何やってるんだよ！来た！7分5秒、6秒、7秒、8秒！7分8秒！でカウント！しかも「あれ、後部のアンダーパネルが割れてなかった？」「そういえば拳動がへんだったね」って、すぐに気づけよ！

トラフィック
恐らく渋滞か事故で負ったアクシデントか、早くも撃たれたか

・・・その後は7分前半から6分後半の時間で推移していた。

ファーストチェンジまで後1時間40分！その周は7分経っても戻ってこない・・・8分！

しかもピット内は緊急ピットインを示す赤ランプが点灯している！
どうした！俺とグレッグはピットレーンに出て行ってその状態を見た・・・

撃たれていた。コクピット周りは出火した後であろう、真っ黒に焦
げていた。

序盤からコンバットシューティングかよ！

面白え！次はグレッグのパートだが、黒焦げのハッチを見てびびり
やがったので急遽俺がスクランブルだ！

ザビエル・マクダニエルは軽傷だが片目を負傷してしまったのでい
きなりチームランズベルクはパイロット2名でその残りのパートを
消化する羽目になってしまった。

コースに出た俺はまもなく前方で銃撃をしている集団を発見した。

こいつらか？リーダーは誰だ？仕方ないから雑魚を2〜3匹始末し
ちゃえ。

貫通力を抑えたA-18オートギャトリングガンが測的を始めた。

さて、最初は君か！それ！ブブブーという鈍い発射音とともに空薬
莢数十個がはじけ飛ぶ！最後尾のワルキューレがのた打ち回ってコ
ース外へスピンして行った。

「あららー、衝撃を受けて操縦桿をいきなり切ったらだめなのよ。
時速800キロだよ？」俺は正直（チョロいもんだな、楽勝だ）と
口笛でも吹きたい気分だった。

一方、僚機を失った一団は動揺していた。その集団は、前方の1機を狙っているのだ。

シリアルコードD-02・・・参加者一覧で検索してみる・・・なんとそれはジークフリード・キルヒアイス機だった。ということはその前方の機体はラインハルト機か！

健気な話であるご主人を助けるためにスピードを遅らせブロックしている。

きつとコックピット内では「ラインハルト様、お逃げください」とか「アンネローゼ様、ジークは約束を守りました」とか叫んでるのかな？（笑）

・・・助けてみるか・・・どうなるのかな人間関係は。

ここで見殺しにしても、助けても失うものはないのである。逆に金髪&赤毛コンビに貸しを作るし！そうと決まれば次のターゲットを探してっと、リーダー格の機体がスピードを下げて近づいてきた。・・・見た顔だ・・・あれは！？

「フレーゲルかよ！」

何とリーダー格として金髪&赤毛コンビを狙っていたのはあのフレーゲルだった。

むかつく奴だった。馬鹿兄のアルフレッドと良くつるんでいるが、話を聞く限り一方的に馬鹿にされているだけの様な感じであった。

正直馬鹿さではどっこいでしょ？しかも6対1でキルヒアイス機をコースアウトさせられないなんて・・・ぷぷっ！虐めちゃうか！

その前に手前のふらふら動揺しているワルキューレを軽く一掃射でコースアウトさせておく。直接通信（お肌のふれあい通信）でフレールが話しかけてきた。

「この！ランズベルクの馬鹿兄弟の弟か！お前！わかっていのか！」「ハイ？ナンノコトデスカ？」すっとぼけてみた・・・「く！貴様の今打ち倒した機体はあのブラウンシュバイク公の6男のヤストルフレッド様だぞ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・げげげ！俺はブラウンシュバイク野郎の一族を撃墜してしまったのか！！

うーん、家に帰れなくなるかもしれん。だが、ランズベルクの馬鹿兄弟は許せないね。お前ら全殺し決定ね。

さらに「兄の様に無能でおとなしく仕えていれば良いものを、命知らずが！」

さすがに馬鹿兄でも同じくらいに無能で馬鹿なお前に言われることもないだろうが？

「その大貴族の御曹司どもが、何を集団でいじめているのだ？情けないの極みなので貴族として見逃せなくてね。」と反論したが「貴様、殺してやる」と同時にフレール機が体当たりをかけて来た。

エンジン音からして異層爆エンジンだ。

だが反射神経に差がありすぎて、反転して背後に衝いた。「バハハ

「イー！」とギャトリングが火を噴いた。空葉莢が後ろに吹き飛んだ。まあ、機体に当たっても貫通はしないのだから、気にしない。

フラフラとした途端にスピアウトし始めてコース外へ消えていった。

あーすっかりした。

残りの機体はスピードダウンして集団としては機能しなくなっている。

キルヒアイス機の後ろの俺の機体よりもさらに後ろに下がってしまい、ほとんど見えなくなってきた。

キルヒアイス機を見るとエンジンが双発式のモデルだ。

つまり我々のアーマールライン社のモデルではなく現行型のオムニインダストリー社製である。

2つのうちの一つのエンジンが上手く点火出来ていないようだ。

デトネーション
失火か。直接通信（お肌のふれあい通信）でキルヒアイスが「アルフォンス殿、かたじけない！」「そっちこそ、後ろから見ると失火してますよ」「最悪はエンジンブローだ」恐らくこのラップをスピードダウンさせてピットに入って修理だろう。デトネーション

さもなくばリタイアしてしまうから・・・「ラインハルト殿の機体はスピードを上げているのでしばらく護衛しましょうか？」「お願いできますか！」「仕方ないでしょう。忠実なるキルヒアイス殿が修理に入られるのだから」

二人の仲に割って入るつもりはさらさら無い。

ただ、2重にメリットがある。一つはキルヒアイスとの親交だ。

もう一つはラインハルトの心理状況である。

キルヒアイスはいいい、

代わりにアルフォンスというわけだが、キルヒアイスと俺の人間関係が気にならないはずが無い。今、どうこうというわけではない。

近い将来に何か使えるのではないかということである。

そんなこんなで俺のピットストップの時間が近づいてきた。順位は30番位上げたかな？先は長いし・・・キルヒアイス救出シーンはメガビジョンでオーディン中に放映されているわけで、他の将来ラインハルトに従う人材連中はどう思っているのか。中々興味深い。

ほぼ3時間半周回したが何人かを救出したわけであり、戦果もも上々かと・・・ライナー・ブルームハルトを救い、同学年のステッチ・フォン・ネイムハルツ（ハードエンジニアおたく）も救った。

気がつけばA-18オートギャトリングガンも弾切れだし、丁度良いか！中盤戦に向けて少し休養をとるのもいいかもしれないので・・・おっとオートピットレーンの表示が出てきたので減速しながらピットエリアに進入した。

手が、いつの間にか握力がなくなっており、ガクガク・ブルブル状態だったことに気がつく・・・（おいおい、俺も冷静じゃないね）

プシュー！気圧調整もかねたハッチを開くとドレイリングが「凄いな！38機抜きだぜ！」と言ってきた。

俺ははっきり言うておくべきだと思い「正直、俺は優勝したい。だ

が、あなた達が足手まといなんだ。頼むから俺の足を引っ張らないでくれないか」いきなり反撃を食らって絶句したドレイリングは、「わ、わかったよ。噂のスーパーボーイは本当らしい。何とか順位をキープして交代できるようにするからさ」最初から話しておくべきだったか・・・ちよつと後悔した。

最初の5時間でリタイアした機数が42機！いいねえ、サバイバルジャマイカ！

次のドレイリングが3時間引っ張って3機抜きの現在189位！

大丈夫！後半戦はひたすら銃撃戦らしいので、一気に挽回も可能だ！

おれが更に3時間半引っ張って19機抜きだった

・・・ちよつとエンジンの失火がデトネーション気になったが・・・いけるところまでいくしかない！既に自分でも何機撃ったかなんて覚えていない。

周回のペースも6分40秒台である。これでラストがスプリント状態になるのか・・・ちよつとやばいかもしれない。

しかしザビエル・マクダニエルは早々に会場から居なくなってしまうし。無責任な野郎だ。

何だろう・・・何か忘れているんだよね。

ラインハルトの護衛は最初のフェイズ以降はキルヒアイスが復活したし・・・

凄い重要なことかもしれない事を忘れてしまっている・・・何だっ

けか・・・中盤戦以降に重大な事件を引き起こすかもしれない事を忘れてしまっている・・・

この時俺はあまりに疲れていて、忘れていたのである。

最初のフェイズでコースアウトした馬鹿フレーゲルの事を・・・後に怒りと後悔で冷静で居られなくなるというのに・・・

第三話…王宮杯争奪耐久レース【Final】

第三話…王宮杯争奪耐久レース【Final】

王宮杯争奪耐久レース（ノイエ・エンデューロ・グランプリ）も中盤を越えて現在33時間が経過している。俺の順位は66位まで来た。400機以上いたスタートだがラップを刻んでいるのは180機程である。メカニカルトラブルでリタイアしているワルキューレが殆どだが、銃撃戦の末に墜落している機も未確認だが100機近くいるはずである。そもそも俺は30機以上リタイアさせているのだから・・・

途中で4機のワルキューレが多重クラッシュした関係で30分中断。ピット待機のシーンがあった。もちろん俺達はそんな時間も体力回復のために眠っていた。瞼を閉じた瞬間グーですから。現在トップはあの！ゾンバルト機である。史実に違わぬKYな操縦で周りのワルキューレを何機もリタイアに追い込んでいるのだ。本人はおそらく気が付いていないし、悪気もないのであるから始末に悪い。上位にはミッターマイヤー、キルヒアイス、などが残っている。やはり予想通り異層爆エンジン組は早い、すでに周回遅れにされてしまっている・・・そして！待ってました！

天候が荒れてきた。やったぜ！雨が風が！これで勝てるぜ。条件はいっしょだ！残りは12時間だまだまだいける！一気に差を詰めてやるぜ！ただ、こっちのワルキューレはたまに失火デトネーションが起きるのが心配である。心配だけど、心配したってトップにはなれないから、フルスロットルだぜ！

強い突風で機体のバランスを崩すパイロットが多い。当然スピードダウンしなければ最悪は衝突かコースアウトだ。トップグループは

ここでギャンブルなどしない。

わかっているからチャンスなのだ。今後のチーム戦略をショートタイムに切り替えることにした。銃撃戦に関わらず、2時間くらいでグレッグと交代を繰り返していくことにする。その2時間はトップチームのタイム以上で周回しなければならぬので、死ぬほどの集中を求められる。面白え！望むところだ！

限られる視野と突風に対処しなければならぬので、銃撃戦が殆ど起こっていない状態のままレースは続いた。ラップ表示にシリアルコードG-14リタイアと出ている・・・ラインハルト機かよ！ああ、全てのイベントで勝利するわけではないんだな。であれば、少なくともこの勝負、勝ちにいくしかないでしょ！こっちも必死。衝突しないように、それでスピードアップで進む・・・気が狂いそうな作業だった。渋滞に捕まると最悪で衝突回避システムの警告音と強制離脱操作を受け入れながらのコントロールは限界を試されているようなものであった。

ミッターマイヤーチームのメンバーのロイエンタールがメガスクリーンを見上げて盟友の飛行を見ながら「先ほどから異常なスピードでランクアップしている奴がいる」「ただの無謀か、それともこれを狙っていたのか・・・」「面白い、ミッターマイヤーとの勝負も時間の問題だ。しっかり見させてもらおうとするか」「シリアルコード・・・ランズベルク家か・・・アルフォンスなのか、あれは・・・」「興味深そうに注視しているのであった、そしてもう一人。「キルヒアイスに追いつこうとしている者がいる。」「あのアルフォンスなのか・・・」「何故急ぐ・・・」「俺と同じ事を考えているとでもいうのか、ただのスピード狂か目立ちたがりの仕業か」「もう少し見ていくしかないだろう」

バンバンバン！キャノピー周辺が銃撃を受けた！」「一瞬バランスを崩したが何とか持ちこたえた・・・誰だ・・・雨でシリアルコードが読めない！スピードダウンで並んでわかった。あれは！バイエルライン機である！」「仕方ないな、バトルだぜ！」ドッグファイト開始である。エンジン音と加速スピードから異層爆エンジンではなさそうだ・・・ならばストリートファイトで慣らした間で勝負してやる。何しろこのワルキューレは3000メートル以上上昇できないわけだから。後ろを取られたらほぼ終わりである。まずは！急加速！ドン！と加速Gが俺をシートに押し付ける。加速重視の中でさらに最高速度域を思い切り捨ててローギヤード仕様にしているのだ。一気にバイエルラインを引き離す。

しかし高速域の伸びは当然バイエルラインの方が上であり、徐々に追いついてきたロックオンセンサーの音がピーピー当てられて聞こえる。「おいでーおいでー」射程ギリギリまで粘るつもりだ。ブーブーン！と左脇を機銃掃射音がすり抜ける。「甘い！未だ遠いだろう！」右に左に操縦桿を振り回して避ける。何だか他の関係ない機体に当たったかもしれないが知ったことではない。バイエルラインもきつと俺だけ追いつけているのだから・・・現在順位は51位である・・・

ようやくバイエルラインの機体も加速域に入ってきたようだ。さあ、勝負だ！ロックオンセンサーがピーと長い音をたてるようになった。いいよ射程距離内に捕まった。でも・・・まだだ、もう少し引き付けないと。俺の機体のオートギャトリングガンが2門あるうちの1門が故障してしまっているの、こっちも迂闊に攻撃できない状態なのである。おまけにレーザーは最初のザビエル・マクダニエル先輩が銃撃を受けて壊して帰ってきたので使えない。

今だ！ガチャガチャ！と操縦桿とスロットルレバーを押し倒して、

急減速！すれすれの横をバイエルライン機がすり抜ける！もらったね！再びフル加速に入って逆に此方がロックオンセンサーを起動した。戦争ではない。レースだから少しのダメージでいいのである。俺は迷わずオートギャトリングガン撃ったブオオオオオオーン！数十発の銃弾がバイエルライン機に命中した。堪らずスピンを起こした。その上を俺は通過した。このレースで合うことは無いでしょ？と思いつながら先を急ぐ・・・しかし！恐らくフルブーストを駆けてきたのだろう。後方監視システムがバイエルライン機の接近を教える。

マジか！再びロックオンセンサーが音を立て始めた・・・その瞬間！・・・ボツ・・・ボウウウウウンとバイエルライン機は派手な白煙を上げてみるみるスピードダウンをしていた。残念、エンジンブローである。悔しがってるだろうな。でも勝負は勝負！メガスクリーンを見ている観衆もバイエルライン機の派手なエンジンブローで大歓声だ。ここで俺もピットインサインが出た。バトルにかまけ過ぎて順位がそれほど上げられなかったには残念だ。現在48位でピットイン。頼みますよグレッグ先輩！俺は残り9時間で交代した。

ぐっすり眠ってしまっていた。俺はピットクルーの同僚に起こされた・・・え、もう出番なの・・・腕のG-SHOCKを見ると交代してから未だ1時間くらいだ・・・「え、何かあったの」・・・頭が朦朧としていて何だかよくわかっていない。ピットクルーから「グレッグが順位を下げている。今55位だ」という報告だった・・・うーん・・・！！「何だって！」グレッグの野郎！ふざけやがって！急いで支度をして緊急ピットインを支持して戻ってこさせた。今後の残り時間を2時間の俺が3回グレッグが1時間の2回というローテーションで行うことにした。既に今回の交代で規定交代数はクリアしたので後は好きな様にいじれるのである。

急上昇してみて思った。グレッグが抜かれたのは腕やモチベーションではなく、機体がパワーダウンし始めていたことが原因のようである。今のところ風は収まり雨は強いが安定性は確保できる。そういうコースコンディションだから・・・銃撃戦である。残り8時間でラップを刻んでいる機体は何と96機である。A-18オートギヤトリングガンは1門しか使えないので、あまり長い連射は出来ない。最後になって丸腰ではこっちも不安だからだ。失火も気になるし・・・それでも、不安な部分はみんな同じじゃねえの？こっからが勝負だよね。で、41位で2時間のノルマを達成してまたグレッグと交代した。

グレッグの1時間はがんばってくれたようで42位（それでもランクダウンじゃんか！頼みますよ先輩！）交代してみるとまたまたパワーダウンしてる！きつと1気筒死んでるなこのエンジン・・・いよいよ残り時間は5時間となり、無線でフリードリヒ皇帝陛下がこの会場に表彰式のために向かいだしたとの話があった。大詰めだ、負けていられない！この2時間で10機抜きをしないと間に合わないかもしれない。エンジン、持ってくれよ！雨は止むなよ！おっと、後方監視システムが警報だ！・・・キルヒアイス機か！まずい！今撃たれるとコースアウトしてしまう！うーん・・・

撃ってこない。操縦スキルで勝負するのか？もしやそっちだって武器系にダメージを負っているのかい？上等だ！決着を付けよう。カモン！ラップタイムが6分20秒台に上がっている！雨が激しいのにこのタイムはまずい・・・晴れたら5分40秒台か・・・そしてたら勝てないな。なんとかこの高速タイムを維持しながら周回しないと！キルヒアイスは後ろにぴったり付いて来ており、まさにテールトゥノーズ状態である。俺のプリントに周りが付いて来れないのでこの状態で5～6機抜いている。

抜かれ際に無理やり銃撃してくる機体もあったが、狙ってないので殆どあたらない。目の前にはうっすらと^{トラフィック}渋滞が・・・邪魔だな。相對速度であれが遥かに上なのに・・・そっと抜く去る手は無いのか？そうだ、ポジショランピングを消すか、後ろのキルヒアイスはずつと張り付いたままなので追い越す直前でポジショランピングを消してやるか！前方の渋滞でどうやら接触があったようだ、火花に続きボン！という音が聞こえて赤い火が一瞬見えた。四散して吹き飛んでくる破片を避ける動作に入った！来た！残骸だ！危ない！急上昇で間一髪すれ回避できた・・・ということは後ろのキルヒアイスは、ヒットしてしまった。ガンガン！という音がして直撃ではないが胴体にダメージを負ってしまったようだ。あつという間に後退した。

メインスタンド前にあるラップスクリーンを見ると・・・30位である！1位は未だゾンバルトであり、ミッターマイヤー機が8位につけている。俺のターンが終盤になったので銃撃戦に切り替えた。ここでグレッグに変わる前に1機でも減らしてやる！ドッグファイトで3機をコースアウトにした。ここでピットインサインを確認しグレッグのラストパートが始まるのだ。

グレッグのラスト1時間は何と！4機も抜いてきた（その内の2機はメカニカルトラブルであるが・・・）それでも現在22位でラップしている！ラップしている総数は62機！減ったねえ！さあ、いよいよファイナルターンのラスト2時間だ！勝負だ！交代する際に「先輩、やるじゃないすか！」といったら、「まあ、本気でやればあのくらいはね！」だったら最初から本気出せや！

弾丸は満載しエンジンも何とか動いている！OK！いくぜい！他の機体も交代のタイミングだったのか急加速、急上昇で19位になっ

ていた！さつさと銃撃戦で前に出て弾丸を空にして軽量化して最後の勝負を仕掛けるつもりであった。ところが・・・前方の渋滞トラフィックで何かが起きているようだ！立て続けに煙を吐いて5〜6機のワルキューレがコースアウトしていったのである。メガスクリーン前の大観衆も大きくどよめいた！・・・！？・・・最後尾から銃撃している奴がいる！シリアルコード・・・何！あいつは馬鹿フレージェルじゃねえか！リタイアしたんじゃないのか？

フレージェルの機体から撃ちだされる銃弾がやけにダメージを負わせている・・・まさか、ルール違反の実弾じゃねえだろうな！フレージェル機に撃ちだす銃弾は間違いなくコンバット仕様の実弾であった。当然ルール違反であるが本人はどうやらお構いなしで打ちまくっているみたいだ。無線で「あのランズベルク家の次男」「馬鹿アルフオンスはどこだ！」と叫んでいる。こいつクレイジード！とりあえず先頭にいるのがミッターマイヤー機であることを確認できたので、馬鹿フレージェルを撃墜してやることにした。そーと後ろに近づいてと・・・ロックオンセンサーも使わないで、ポジションランプも切ってこっそり、こっそり、ぴったり背後をとってから無線で「よう、馬鹿フレージェル！」「生きていらしたか」と、同時にロックオンセンサーと銃撃を始めたブオオオオオオオオオ！とかなりの連射を行った。

たちまちコントロールを失ってスピンを始めたフレージェル機だったが、俺がぶち抜いた後から物凄い勢いで追いついてきた。あの急加速はありえないでしょ？もしかしたら違法エンジン？ミッターマイヤー機と並んで飛行していたので無線で「あの加速は尋常じゃない、まるで疾風だな」って話してたけど・・・疾風は後であなたが付ける冠だから取っというたほうが良いのでは？なんて思ったりして、ちよっとおかしかった。「あれはルール違反の実弾ではないですか？」と話したら「何！やはりそうか、奴に撃たれた機体が爆発していた

のでもしやとも思ったが」俺の現在の位置は5位と8位集団である。もう少しなだけどなあ・・・「あの、馬鹿フレーゲルは俺が目当てらしいので、離れていてくださいね」「いやいや、年下のアルフオンス殿に一人で戦わせたとあれば、ミッターマイヤーの名が廃る」「相手はルール違反の実弾を使っているのですから。助太刀しますよ」と言ってくれた・・・うーん頼もしい！

無線で馬鹿フレーゲルが「貴様、アルフオンス、この悪天候のどさくさで殺してやるぞ!」と恨み声を発していた。こっちはこんなところでこんな無能野郎と遊んでいる暇はないので、「どうぞ!勝手になさってください!」「気が散るんで無線使わないで下さいね!」とガツン!と話しておいた!一瞬フレーゲル機が怒りの青白い炎に包まれている気がしたが・・・いきなり撃ちまくってきた!ロックオンセンサーも何もあったもんじゃない!とにかくぶっ放してるって感じだね。ただし実弾だから当たると厄介なんだな。俺とミッターマイヤー機は交互に前後を左右を振りながら移動していて狙いを定まらせない!

基本俺しか見てない訳だから、スルスルとミッターマイヤー機はスピードを下げてフレーゲル機の後ろに回り込もうとしている。流石だ!疾風ウォルフ!任せたぜ!何でもかんでも撃ちまくってるから他の機体に当てやがって、2機墜落してしまった・・・まあ、抜く手間が省けたけどね。ガンガン!やばい!俺の機体にも被弾してしまった。自動消火装置!・・・そうだ!いいぞ!損傷軽微!フレーゲル機の後ろに気配を消したミッターマイヤー機がぴたり付いていた。「やっぱりルール違反はいけないよね」と言いながらブロオオオオオン!と射撃し、全弾コックピットの風防ガラスに着弾した。俺達の装備している弾丸は貫通しないがガラスにひびを入れることは簡単だった。視界を失ったフレーゲル機はスピードダウンするしかなく、あっという間に後方に消えた。

「ありがとうございます！助かりました！」「いえいえ、大した事はしていませんよ。」と言葉を交わし・・・「では、ラストスパートに向けて！」前方の1位と4位集団は目の前だった。48時間耐久レースも残すところ40分である。俺とミッターマイヤー機はトップ集団に追いつき、今や1位と6位集団となった。後方の集団は半周以上つまり2分以上差がついており、優勝者はこの6機の誰かがなるのだろう。俺のワルキューレは現在ギャトリングガン弾切れ。油圧低下、水温上昇・・・調子はぜんぜん良くない！何とか持てよ！エンジンよ！

1位集団でずっと周回を重ねながら、決定打をみんな出せずにいる。みんなタイミングを計っている。ファイナルブーストのタイミングを・・・俺のエンジンはファイナルを少しチューニングしてある。みんなフルブーストをかけるにはエンジンの状態と相談しながらになるが、平均30秒と40秒くらいのブーストタイムでセッティングしているはずだ。だが俺は20秒。それもMAXでだ。そもそも異層爆エンジン組みにまともにぶつかっても勝てないのでエンジンの短命覚悟でスーパーハードセッティングをしたわけだ。20秒間しか持たないが最高速度は1.6倍くらいにはなる計算だ。エンジンが持てばだが・・・

みんな躊躇しているのは48時間ぶっ通しで飛んできたエンジンだから、耐久性に自信がないのだ。俺はそのほうが助かる。むしろ周りが早めのブーストを駆けられると追いつけなくなると思うので、もっとみんな慎重になれ！

俺は瞬間最大順位は1位にもなっているが異層爆組に最高速度でやられてしまう。悔しいが仕方がない。いよいよ残り時間15分を切った！後、2周か3週だ！踏ん張ってくれ。みんな軽量化を求めるの

でもはや銃撃戦もない。弾丸が残っていないのだろう・・・う！失^{デトネ}火だ！・・・しかし一瞬だった。いよいよエンジンも終わるのか・
・順位は5位。ミッターマイヤーは3位につけている。

もはや体力も機体の耐久性も限界だ！また、ラップを刻んだ！お、
1機ブーストを駆けた！濃い白煙が吹き出ている！早い！ぐんぐん
離れるぞ！おい！・・・と思った瞬間にボン！！と派手な爆発音と
同時にスピードダウンしてしまった・・・やっぱりみんな苦しいん
だね。どのみち俺のワルキューレは最後の最後に仕掛けるしかない
のだから。後ろからミッターマイヤー機を見てるが2度ほど失火が^{デトネーション}
起きている。不安はいっしょだろ！って。

さらにラップを刻んだ。タイマーが48時間を越えた！ファイナル
ラップだ！雨は最後まで止まないで振り続けた。俺はこの天候だか
らここまで出来た。現在4位だ。最後尾の機体はじりじり離れだし
ている！恐らくエンジンが持たないのだろう！ミッターマイヤーは
2位のまま、1位は信じがたいがあの無能のレットルを後に貼られ
るゾンバルトである！今3つ目の空中パイロンをクリア、後は11
キロの直線と第4パイロン・・・最終コーナーだ。どうする。みん
な様子を探るために自然と接近してきた。苦しい！もう少しだ！だ
れが来るんだ！おっと！ゾンバルトとミッターマイヤーが同時にブー
ストを駆けた！

ドン！一気に加速し始めた！まずい！このままでは追いつけなくな
る！ゴールまでまだ1分ある！第4空中パイロンクリア！だめだ！
勝負だ！30秒くらいあるが持たせるんだ！勝つんだ！いけ！ワル
キューレ！フルブースト！俺はフルブーストモードのスイッチを押
した・・・ドドン！と物凄い加速感と強烈なGがかかって来た。

周りの景色が全く見えないジャイロスコープで辛うじて真っ直ぐ進

んでいることが確認できる時間が長い！まだなのか！持つのか！ミッターマイヤーとゾンバルトが眼の前にいる！ついに追いついた。並んだ！もうすぐだ！次の瞬間！！！！

ボボウオオオオオオオオオオオオウ！

エンジンがブローしてしまった。それでも慣性でゴールインできた！

順位は？激しいスピードダウンでコントロールがし難くなったワルキューレを操りながらラップモニターを見た・・・4位だった・・・

熱く厳しい48時間耐久レースは終わった。

表彰されないので、さっさと手続きを済ませ家に帰るつもりだ。

パルクフェルメの通路の両脇には物凄い数の観客が集まっていた。優勝はゾンバルト！信じられない！2位はミッターマイヤーが3位は・・・同級生のウェイマン・ティスデイルというやつだった・・・ミッターマイヤーのそばにはロイエンタールが付き添っていた。仲がいいなあ！そして冷たい視線を感じた後ろを振り向くと馬鹿フレードルがいた「貴様、覚えて置けよ！」と物凄い形相で睨みながら去っていった。こいつはいずれぶん殴ることになるんだろうなあと考えながら片づけを手伝っていた。

あーあ、一応飛び級の申請はして見るつもりだ。何しろもう一步だったのだから！価値のある4位である。早く宇宙デビューしたいなあ・・・と思いながら雨が上がり満天の星を見上げるアルフォンスであった・・・

第四話…初陣！ナイメーヘン遭遇戦！

第四話…初陣！ナイメーヘン遭遇戦

飛び級申請が無事通り、俺は上級士官学校に進級した。

稀な飛び級扱いなので周囲の視線も冷たかった。

受ける授業も何となく俺に対しては不親切な空気が流れていた。

ただ、既に進級していたミッターマイヤーとロイエンタール、ビツテンフェルトらとは非常に親密な関係であれたことが幸いだった。

彼らとのつながりの仲でシュタインメッツ、ルッツ、ケンプらとも交流を深めている。

上級士官学校とは・・・まあ、俺のいた時代で言うところと大学と専門学校の合体したような感じである。

学力の向上は当たり前だが、現在銀河帝国は自由惑星同盟なる叛徒どもと戦争中であるので当然、戦時下における対応能力は要求される。

幼年学校では小学校レベルから中学1～2年程度の学習内容であった。上級士官学校では、学部学科はより細かく分けられる。適性や本人の希望が考慮される。

通常は馬鹿貴族どもは砲術科に進んで早くから戦闘艦の艦長や指揮官になりたがる。

そりゃあそうだよ、命令したがる・・・というか他人の命令なんか聞いたことが無い奴らだもんね。

そりゃ仕方ない。

俺はその辺は弁えていると言うか、目的が違うので航空科でワルキューレを極めることにしたのである。この航空科とは上空や宇宙を問わず、高速機動戦についての訓練学習を目的としている。だから大貴族ではない連中はここで腕を磨いたりするわけだ。

逆に砲術科は一般的にあんまり人気が無い。変に大貴族の御曹司のサロン化している・・・でも、そんな座間で大丈夫なんだろうか・・・艦隊を指揮するんだよね？近い将来に・・・だからラインハルトみたいに一気に駆け抜けられるのだろうけど・・・そこに目をつけたわけでもあるし、王宮耐久レースでドッグファイトの醍醐味にヤラれた部分もあるんだけどね。

あとはこの航空科に来ている人材である。後の帝国の双壁や原作上でラインハルトに仕える連中がほとんど揃ってる。つまりここで影響力を・・・いえいえ、リレーションを高めて来るべき時に仲間になってもらいたいと考えた。

訓練は座学や模擬空戦などが行われ、徐々に実戦に向けての訓練が始まっていく。

訓練でくたくたになってベッドに倒れこんで熟睡しかけたところで緊急出動サイレンだ！再び飛び起きてパイロットスーツに着替えてワルキューレに飛び込む！くたくたになって戻って、朝食のトレイを持って並んでいると再び「緊急出動！パイロットは2分後に格納庫へ！」のサイレンが鳴り響く・・・もう・・・ぐったり。

上級士官学校に入学した時点で階級は少尉扱いである。実戦を経験して功績を立てると中尉になる。

その後は学生時代で大尉扱いになれるか、実戦配備後になるのか、そんな進み方である。

戦闘艦の艦長は原則大尉以上である。実戦に出て経験を積みたくない馬鹿貴族どもは何とか金と政治力で実戦経験無しでまず大尉扱いを獲得して、そこから更に艦隊運営責任者として少佐とかに勝手になっていくのである。

そんな俺達が宇宙空間での高速機動戦闘の模擬戦を実施するために、現在訓練艦隊に配備され、艦隊運営とワルキューレと複座式戦略爆撃機ドーンコメットの实戦訓練を行っていた。

訓練宙域はイゼルローン要塞から同盟領方面の回廊内アステロイド・エリアで小惑星帯が広く展開しているところである。

ワルキューレの宙域内戦闘に限って言えば、ミノフスキー粒子が辺りに蔓延しているために通信回線は殆ど役には立たない。周囲500メートル位までの緊急衝突回避システムと肉眼での目視しか生き残る術はないのである。

艦隊の行動ともなれば大出力のエネルギー放射があるので、ミノフスキー粒子干渉下であっても位置の確認は容易である。

そんな状況の中俺達はワルキューレで高速機動戦の訓練を行っていた・・・最初のうちは機内にある立体天球儀上での上下位置感覚が掴めないで苦労した。

集結のサインを確認してから実は俺だけ逆さまで飛んでいて上官にこっぴどく怒られてしまった。しかし、慣れてしまえば他の仲間には遅れを取らなかった。元々優れた運動神経があるわけで、ドッグファイトもバスケットボールで言うところの1on1（一対一）なわけだから、むしろ俺が得意とする分野である。

訓練宙域は通称…ナイメーヘン地区と呼ばれている・・・遠すぎた橋か？

訓練14度目の出撃が行われた。

訓練といっても実弾とミサイルと急降下用の爆装もしている、フルスペック状態で行われるのである。

訓練教官はウォルダースという。

めちやくちゃやかましいが、実戦経験が豊富なおっさんで我々訓練生の間では「ウォルダースの口撃は10機のスパルタニアンに囲まれるより怖い」と恐れられている存在であった。

本人の口癖は「もうじき年齢制限で後方勤務に追いやられる。そんな貴重な時間をお前らのような屑訓練生と共に居なければならぬのは、とても家族に話せるものではないな」である。

小惑星帯を敵の艦隊と見立て、高速戦闘のヒット&ウェイの訓練を行っていたが訓練艦隊の位置がやけに動いている事に気がついた俺は近距離通信（お肌のふれあい通信）で確認した。

「ウォルダース上官殿、訓練艦隊がずい分我々の前方まで回りこんでいますが、大丈夫ですか」「あれでは強襲後の離脱時にコースイ

ンしてくる艦艇があるかもしれませんが・・・」

我が上官殿は「ふむ、アルフォンスよ。お前は訓練が足りないようだな、どんな状況下でも一撃離脱を成功させるのが我々ワルキューレ戦隊の役目だ。」「貴様に命令する、再度ナイメーヘン外周で連続攻撃訓練を開始せよ!」・・・

あーあ、言われちゃったかあ、めんどくせえな!と操縦桿を切り返した。

急速上昇の後にターゲットをコンマ数秒でロックして一気に急降下する・・・あれ、何だか訓練艦隊の数が増えてやがる。

70隻位のはずなのにいつの間にか120隻を越えているのか・・・いつ増えたんだ? さあ! 訓練のターゲットは?・・・あれ? 急加速しながら何か違和感を感じていた。

数が増えていることもそうだが、艦隊の隊形が横一文字隊形である。訓練時にはありえない。何故なら戦闘を意識した隊形ではないのである。

やれやれ、暢気なやつらだ。仕方ないからちよつと脅かしてやるか、俺は中央の大型艦に向けて急降下を開始した。

その直後機能しない無線機が激しい雑音が起こった。「何だ、また、上官殿か」余計な事をするな! みたいに怒鳴っているんだろう。

艦隊も俺の急降下に気づいたのだろう。

慌てて陣形を変えようとふらふらしている。

「遅い！」ターゲットロックオン。ロックオンセンサーが激しくピーピー鳴りやがる。艦艇識別確認！コーション・イエロー！……え、コーション・イエローのはずねえだろ。

イエローは同盟軍艦艇に設定してるのに……。その瞬間猛烈な対空防御射撃が行われた！「！同盟軍かよ！」急速離脱を行う時に爆装してある対艦爆弾を全弾発射した。

物凄いGの後なので命中したかどうかは、戦闘確認カメラが記録しているだろう。離脱後に再度転進して同盟軍艦艇に突っ込んでいったがあまりの対空射撃の激しさに全く近づけない。

「貴様、何をしている！」ようやく、味方を連れて上官殿が戦闘エリアに入ってきた。

しかも前方にはスパルタニアンが発進して来ている！

どっちも遅いや。

「上官殿報告します。敵艦隊を発見いたしました。」

「わかっておる！見ればわかる！」「全機突撃隊形展開。これは実戦である！訓練ではない！」

両方の艦隊もお互いを確認しており、艦隊戦の用意をしている。訓練艦隊も訓練とはいえ普通に戦場使用が可能な巡航艦などで編成されているので戦闘は問題ない。運よく俺は仲間のグレッグを確認し、共同でスパルタニアンに対峙した。この実戦でどれだけの仲間が撃墜されるのだろうか……

正面にスパルタニアン。

俺が引き付けてドッグファイトを仕掛ける瞬間に斜め後方からグレッグが割って入り襲撃して撃墜する。

後ろにつけられてもロックオン寸前に大回りした俺、グレッグ、が射撃を行う。前方に集中している敵は一たまりもない。相手に有効射撃を繰り返していたので補給が必要になった。

しかしまだ、スパローミサイルが残っているので、前方で射撃を行っている巡航艦に向けて一撃離脱を行う。至近距離では敵の艦艇に対する警告サイレンが激しく鳴っている。対空砲火を潜り抜けて何とか全弾発射した。離脱時に至近距離で対空ミサイルが爆発し、少しダメージを負ったようだ。

スパルタニアンに対する武器が弾切れになるので急いで戻る道中に散々敵機に追い回された。

こっちがダメージと弾切れをわかっているようだ・・・むかつく！制空権掌握率は同盟が65%となってしまった。やはり訓練生では駄目なのだろう。

ようやく母艦に戻って補給を受けられる。整備メカニックから「少尉、何だか凄い戦果を挙げられているらしいじゃないですか！」え、そうなの・・・「うーん、よくわからん。」

次はワルキューレでいくかドーンコメットでいくか、ちょっと悩むところだが、空戦が続いているので、ワルキューレで再度発進することにした。

補給待機時間は10分・・・艦内のフードコートでフルーツジュースとプロテイン錠剤、ハムカツサンドイッチを流し込んだ。

目薬でシャキ！としてヘルメットを被り、コックピットに収まった。

メカニックが「ダメージの修理はOKです。」「全開でいきます！御武運を！」といって射出カプセルに送り込んでくれた。

発進！ドン！という発射のGが体をシートに思い切り押し付ける！立体天球儀が敵味方の位置を表示する・・・ずい分やられているな。同じく補給の終わったグレッグと同じ分隊所属のステイブ・ワトソンが合流し3機で中央を突破することにした。

途中でギャトリングガンで2機のスパルタニアンを撃墜した。6門のギャトリングガンの掃射を受ければひとたまりも無いのである。

高速機動戦域は既に同盟軍が優勢で進んでおり、帝国ワルキューレ戦隊は劣勢であった。

目立つならこんな時である事はわかるのでグレッグとワトソンに「目立ちたいので、艦船攻撃に切り替えようと思うが」と話したら、高速機動戦の雌雄は決しているので手柄狙いでいいかも、という返事だったので目標はスパルタニアンではなくて、宇宙母艦である。

同盟軍艦隊の間をすり抜けながらインターセプターの追撃を振り切りつつ宇宙母艦を探した。恐らく2〜3隻はいるはずである。勢い余ったインターセプターが仲間の駆逐艦に衝突して駆逐艦も爆沈した・・・あれは俺のスコアになるのだろうか・・・

敵のスパルタニアンも徐々に母艦に戻り始めた。

帝国の訓練生ワルキューレ戦隊も急いで収容されている。

後5分もしないうちに艦隊戦になるだろう。急がないとね、グレッグが「いた！4時の方向！宇宙母艦だ」「距離300」いくぞ！グレッグが見つけた宇宙母艦はスパルタニアンがほぼ満載状態の艦であった。一気に補給に戻って来て補給中なのであろう。

チャンスだ！

やるしかない！

後方からインターセプターが6機！猛烈な勢いで追いかけてきた。俺の意図を察したのであろう。「距離100！いくぜ！グレッグ！ワトソン！」艦底から近づいてスパローを全弾発射。全弾補給中のスパルタニアンに着弾！上昇し対艦ミサイルと爆弾を艦橋付近に全弾発射！だ！

急上昇と緊急離脱で同盟艦隊の中から離脱しているが怒りのインターセプターが20機くらいで追いかけてくる！

爆撃の結果を確認する暇も無い。

2機のインターセプターを撃墜したが俺のエンジンの装甲版も打ち抜かれ、じきにパワーダウンするかもしれない。

グレッグはもはや弾切れらしく、必死で逃げている。もうちょいで帝国艦隊干渉宙域なんだ！逃げろ！そのとき「ドワラララララララララー」と凄まじい音でギャトリングガンの一斉射撃が始まった。

ウォルダース殿が訓練生を率いて救出に来てくれたのだ。

「命令違反だぞ。アルフォンス、グレッグ、ワトソン」「私は今回の訓練で対艦戦闘を行えとは言っていない。」うるせえなあ・・・こっちは必死なのにさ。

援軍を見て同盟軍のインターセプターが引き上げていった。何とか助かった。

巡航艦2隻、宇宙母艦1隻、駆逐艦1隻、スパルタニアン9機

これが俺の戦果らしい。

すべてはカメラのデータを照合した結果である。一躍スターダムに踊りだせた。

訓練生でこれだけの戦果を挙げたのは銀河帝国以来初かも知れないと・・・帝国全土の高速通信で一躍ニュース扱いである。

俺は2年を残して大尉に昇進。
いつでも実戦部隊に配属希望が出せる。

しかも艦長か空戦隊隊長格を選べるのである。俺はただの艦長には興味が無く、むしろもう一段結果を出して少佐に昇格後に分艦隊の指令として進んでいく事を考えているので、今回は空戦隊隊長を選択した。

数年後銀河帝国の政治・軍事の頂点を極める事になる俺の記念すべき初陣はこのような形で幕を閉じた。

俺の愛機ワルキューレは性能を3倍にアップさせるチューニングを
施し、機体もミッドナイトブルーに染めて、違いを出した。

これが後に同盟軍パイロットの中で、青き流星として恐れられる事
になるはじまりである。

第五話：第2次ナイメーヘン／アルレスハイム星域会戦・・・？

第五話：第2次ナイメーヘン／アルレスハイム星域会戦・・・？

昨年のナイメーヘン遭遇戦で戦果を挙げた俺は上級士官学校の生徒でありながら第139高速機動戦隊（ワルキューレ戦隊）の空戦隊長に任命されたのである。

管下の機体は48機にもなった。

責任は重いのである。

馬鹿兄アルフレッドも「ランズベルク家の栄光はここに極まれり！」とうれし泣きしやがって。

「我々兄弟は銀河最強の兄弟かも知れぬ」・・・いい加減にしてくれ、俺は物凄く忙しくて兄の手助けはもうできそうもないのだから・・・いじめられても自力で抜け出せよ！

分隊長はグレッグ・ドレイリング、ケネス・ギルフォード、アルマリック・アズヴァール、リュウ・ウェイの4名でそれぞれ12機くらいを受け持つのである。

グレッグは王宮杯の耐久レースからの付き合いになる。以外に冷静に状況を判断できるところがあり指名した。他の3名は独自に調べた結果、恐らく猫の子ではなく虎の子のほうであると判断した連中である。

そんな我々の第139高速機動戦隊は士官学校の生徒でありながら、実戦参加の命令が来て帝国軍イゼルローン要塞駐留艦隊所属のカイ

ザーリンク中将の艦隊に配属され、高速巡航艦ホルツグラフに我々は待機している。

このホルツグラフは2世代前の老朽艦であり、射程が通常の同型艦の6割位しかない。ミサイルや主砲の連続発射時間が遅い。スピードが出ない。乗り込んだとき思わず

「大丈夫なのかよ！これ！」と叫んでしまった。

航行中もギシギシ音がするし・・・でも元々の乗組員の連中は「ここまで生きながらえてきたんだから縁起が良い！」といってるし・・・

しかも史実どおりなら、半分以上を失って負けてしまう戦いのはず・・・
・ 相手はあのビュコック爺さんだし。

この出撃予定地である、アルレスハイム星域とは帝国領イゼルローン回廊、自由惑星同盟方面にある星域の名称で、数多くの小惑星が漂う場所である。
アステロイド・エリア

特に不安定な成長活動中の恒星や未確認の新生ブラックホールの類はない比較的安定した星域であったが、今まで主だった艦隊戦の宙域に選定されなかったのは、その小惑星群が障害物になってしまい、帝国及び同盟の警備地域としてもっとも厄介な場所と指定されていた。

つまり、ここだけは衛星による警備網ではなく、艦隊や艦載機によるマンパワーでの哨戒が必須とされていたのである。銀河帝国も定期的な監視艦隊を派遣しチェックを怠っていなかったが、もちろん完全ではないのである・・・

そしてアルレスハイムの最南端には俺の初陣を飾ったナイメーヘン地区がある。個人的には好きな場所だ。

各分隊長とのブリーフィングを行うと必殺1対1のドッグファイトをやりたがるグレッグと数の有利を持って攻撃に当たらせるべきだというシステムアタック論者のアルマリック・アズヴァールがぶつかった。

「ワルキューレ載りの本質はドッグファイトである。そのためにパイロットは空戦技術を血のにじむような努力で習得しているのだ」
「集団行動によるアタックなど同盟のスパルタニアンどもに笑われるというものだ！」と強気のグレッグ・ドレイリング・・・

「では、ドッグファイトで敗れたらどうする？」「パイロット一人作り上げるコストをご存知か？所謂、キルレシオが高いのではないか？だとしたら死なない作戦で戦ったほうが良い」とアルマリック・アズヴァール（これからAAとします）

「では集団戦闘の優位を説かれるが、我が空戦隊よりも多数の敵に攻められたら、どうするのだ」

「その集団を細分化して数の有利を引き出せばよい」

「逆の同盟が良く使う三位一体の攻撃に対してはドッグファイトでは切り抜けられないではないか」

議論に収束の気配がなく、俺は宣言した。

「多数を持って少数を叩く！戦略は以上だ、各員の奮闘を期待する。以上だ」

決まってしまう後はそれぞれが行動をチェックするだけの話である。

「同盟軍は1万6000隻だと？」

カイザーリンク中將はフェザーン航空宇宙局からの伝達情報に呻いた・・・

我々は1万3000隻である。

副官のウインメル少將は「どうなされますか。このまま戻られますか？」と尋ねた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「一戦もせずにイゼルローンに戻れというのか・・・」

「出来ない話だ・・・イゼルローンのゼークト大將に逢わす顔がないわ。」

「では、数の不利を承知で・・・」と心配そうなウインメル少將

「そもそもフェザーンの奴等の情報が正しかったことがあるのか？」

「いつもいつも訂正するなどいつてくるではないか」

「しかし、今回が正しかったらどうされます？」

「その時は一戦してずるずる後退し、小惑星帯から引きずり出してトールハンマーの餌食にすれば良いではないか！」

・・・そんな繊細な作戦をあなたは貫徹できるのか？現場対応させられる兵士の身にもなれよ！・・・と心の奥で叫ぶウインメル少將・・・俺はこんなところで死ぬのはいやだから・・・

「我が艦隊、アステロイド・エリア小惑星帯に入ります」

「各艦、小惑星を盾に取り、監視体制に入れ。同盟の艦隊はまもなく罠にはまるぞ」

カイザーリンク中將は少し興奮した声で全艦に伝えた。

これで大勝利を収めれば俺はゼークトに並ぶ……この俺が帝国軍大將だ……イゼルローン駐留艦隊の司令長官にだってなるかもしれない……気合だな……

旗艦リオ・グランデの戦闘艦橋の大スクリーンを見つめてビュコック大將はつぶやいた。

「昨年末のナイメーヘン地区での遭遇戦な……」 「異常な被害を受けた戦闘であつたそうだ」

「聞いております。」 「何でも数機のワルキューレに甚大な被害を受けたそうで」 副官のファイフェル中佐が同じく大スクリーンを見ながら続く。

「そんな時代になってしまったのかもしれないなあ」 「戦艦の数ではなくて、戦闘機の数で勝負が決まる……」 「私のような古株はもう用無しかもしれんな……」

「しかしワルキューレやスパルタニアンが長駆してイゼルローン回廊に進撃することは出来ません。まして、要塞を攻撃などできませ

んが・・・」涼しい瞳を司令官に向けながらファイフェル中佐は話す。

「近い将来、それも可能になってしまうかもしれない・・・」「我々の歴史というのはどうせ無理だとか、まさかそんな事が、ということを乗り越えてきた事でもあるのだ・・・」

「せめて私の生きている時代は艦隊戦で決着が付く形でいてほしいと思うよ」

「・・・ん、・・・つつ・・・」額を軽く押さえたビュコック中将の顔が少し歪む・・・

「司令！どうなされました！」少し心配顔のファイフェル中佐が尋ねた。

「ん、何でもない・・・頭痛のようだ・・・」「風邪でも引いたのかな・・・」

「いけませんな。作戦前だというのに・・・」「風邪薬を飲まれますか」

「ん、いや、やめておこう作戦前だしな」ビュコックは終わったら服用して休むか・・・と考えた

「味方先発艦隊より入電！」「ナイメーヘン地区で熱源反応確認！」一気に艦橋内に緊張感が走った。

「来たか・・・」「後方のウランフはどうしておる」とファイフェル中佐に聞いたです。

「ウランフ提督の艦隊は予定通り、我が軍の後方2万宇宙キロに展

開しております。」

何故か原作と違い、増援軍としてウランフ提督の第4艦隊が姿を見せていた。

歴史の流れが変わってる？

「帝国の奴ら、まさか今回は前回の遭遇戦の弔い合戦と思うまいて・・・」

アルフォンスが最初に攻撃し、初戦果を挙げた巡航艦の艦橋には司令官であるカウメロ・アンソニー准将が載っていた。もともと第5艦隊ビュコック中将の高級幕僚の一人で今回始めて艦隊指令として指揮を執っている最中の遭遇戦だったのである。旗艦サンタナは爆沈、准将以下全員死亡が確認されたのである。

通常の艦隊戦を挑む気配の中で今回は完全に相手を打ちのめしてやろうとビュコックは考えた。

再び遭遇戦を装い、背後にウランフ艦隊を回して完膚なきまでに叩きのめすつもりだ。

ただ、懸念はウランフ艦隊の位置が背後にイゼルローンを置いた形で戦線を維持するので反転攻勢を受けるとトールハンマーが気になるのである。

「小惑星帯に敵艦隊確認。数6000隻!」「ワルキューレを発進させている模様」

「こちらもスパルタニアンを出せ!」「ファイフェル中佐、続けて艦載機が戦闘空域に達するまで主砲、リニアレールガン、ミサイ

ル、撃ちまくれ！目標は方角でいい！」

先発艦隊のマイクルーア少将は

「まだ撃つな！」「居場所を悟られるな！」と小惑星に身を隠しながら叫んだ！小惑星に先に陣取った銀河帝国は本来優勢で戦況を進められるはずであった。しかしおよそ数十箇所から艦砲射撃が始まった。

そしてその数発は味方のワルキューレの進行方向に向けられていた。

「後方！高熱源体！」

「何だと！」「全機右展開！」俺は脂汗をかきながら味方を助けるのに必死だった。

俺の第139高速機動戦隊は無事だったが、命令が数秒遅れた空戦隊は味方の主砲エネルギー弾に打ち抜かれ、一瞬に十数機が消滅した。

「！！」味方のワルキューレ戦隊は大混乱だった。そこへ同盟のスパルタニアン部隊が殺到してきた。数はほぼ互角だが、何しろ指揮系統がズタズタで機能しているのは俺の空戦隊だけだった・・・

俺達は2機がふらふらと敵の目の前に出て、追いかけると急いで逃げる。追いつきそうな瞬間に渦巻き状の半包围網を仕掛け一気に3〜4機を葬る作戦である。効率的かどうかは別にしてこちらは被害無しで既に15機以上撃墜できている！

リュウ・ウェイがまたうまい演技で逃げ回るので、（AAなどに言わせれば、それが本当の実力であり、奴の空戦はドッグファイトで

はないとか）面白いようにスパルタニアンが引き込まれる。

空戦隊内ではこのフォーメーションを『ブラッディ・スクリュー』と読んでいるが、俺の時代では既に戦国武将の上杉謙信たちが行っていた車駆りではないか・・・

ブラッディ・スクリューを抜けたスパルタニアンが2機いた！返り討ちで味方のワルキューレが4機撃墜されてしまった。

「おのれ！」AAが急上昇して襲い掛かるロックオンしてからトリガーを引くまでの時間がわかるかのようにギャトリングガンのウラン235弾を回避している。

「やる！」俺はフルスロットルで追いかけた。何しろ俺のワルキューレは通常の3倍のスピードが出るチューニングを施している。

グワン！と物凄いGが掛かる！一気に2機のスパルタニアンを追い越した。それが作戦なのだが・・・

「急加速のミッドナイトブルーのワルキューレ・・・蒼き流星か！」

「コーネフ！あいつはもらったぜ！」

「いえいえ、共同戦線でいきましょう。ポプラン殿」2機のスパルタニアンはオリビエ・ポプランとイワン・コーネフという。後の同盟空戦隊の大エースである。

2対1のバトルだが互角である。機動性は俺のワルキューレに分があるが、なかなか連携が取れていてお互いに数発被弾している。

俺の空戦隊は予定通り同盟軍第5艦隊に攻撃を仕掛け始めた。俺は

この将来の大エースどもに苦戦している。

第六話：第2次ナイメーヘン／アルレスハイム星域会戦・・・？

第六話：第2次ナイメーヘン／アルレスハイム星域会戦・・・？

艦隊戦の方は・・・

同盟軍第5艦隊旗艦リオ・グランデの戦闘艦橋内では

「奴らの方から居場所を記すような砲撃を行うとは・・・」 「解せないな・・・」 少し悩んでいるビュコック中将に「提督、罨である」と小官は判断しますが・・・」とファイフェル中佐が答えた。

「罨か・・・しかしやつらは、味方の艦載機を吹き飛ばしてまで行く罨とは何だ???」

「当面は小惑星帯の中から発砲してきたエリアへの砲撃に留める」

一方、カイザーリンク中将の艦隊は大混乱であった。小惑星帯で待ち伏せすることが作戦であったにもかかわらず、砲撃を行っている部隊がある！当然同盟軍もそのエリアを集中的に砲撃してくるので凡そ自分達の潜伏場所を教えているようなものである。

「ええい！何をしている！」

「誰が勝手に攻撃をしても良いと言ったのか？」 「分艦隊指令を出せ！」

当然小惑星帯のそこかしこに、ミノフスキー粒子は散布されており、通信状況はひどく悪い。ノイズが多いがぎりぎり分艦隊指令のマイクルーア少将に繋がった。

「マイクルーア少将出ました」とウインメル少将から。

「貴様！何を考えている！基本方針を忘れてもしたのか。」スクリーンに向かって絶叫するカイザーリンク中将・・・

（あーあ、怒ってる暇なんか無いんじゃないの？戦局は不利に動きそうだし・・・だめなおっさんだね）瞳の片隅で怒ってるカイザーリンク中将を横目に見ながら

（今度は降格でもいいから配置換えを希望しよう・・・長生きできそうに無いな、この方のもとでは）と考えるウインメルであった。

ノイズの中で分艦隊司令のマイクルーア少将は

「申し訳ありません。原因を調査中です」と言うに止めている。
「原因が確認でき次第報告いたします！」スクリーンは切れた。

おのれ、誰がこんなことを・・・と、いきり立つマイクルーアであったが、すぐに発砲者の集団がわかり、旗艦に召集させた。数名の艦長が戦闘ブリッジに招集され、状況を説明することになっているが、皆の口から出てきた言葉は以外な発言だった・・・

「同盟なんか皆殺しだ」、「我々は負けすはずが無い」「敵を叩いて一気に同盟本拠地に乗り込むのだ」

・・・何を言っているんだろうか？と直接話しに参加はしていないが、クルーと打ち合わせている振りをして話を聞いていたウインメルは思った。

絶句しているカイザーリンク中将とマイクルーア少将は「貴様ら！

何を言っているのか？」「頭が麻痺でもしているのか！」

その発言の瞬簡にウインメルとカイザーリンクは同時にある事実を思い出した。

「き、貴様ら・・・サイオキシン麻薬か・・・」カイザーリンクは呻いた。

サイオキシン麻薬はその当時の銀河帝国、同盟両方の軍隊に蔓延しつつある薬物の名前であった。一般的に軍隊での薬物の蔓延経路は下級兵士からというケースが多い中、今回のサイオキシン麻薬は上級士官から蔓延しだしたといわれている。

上級士官の場合通常の乗艦前のドラッグチェックは実施されない場合が多いので、検査に引っかからないのである。また、この薬物構成上、尿や唾液からは成分が分泌されにくく発見が困難な麻薬として対応が遅れているのも事実である。

「銀河帝国艦隊の艦長ともあろう者が薬物によって正常な状況判断ができないとは！」

「軍法会議は覚悟しているよ！」「SPはこの者たちを拘禁・・・」最後まで言葉が発せられないのは召集した艦長たちがいきなりレイガンのカイザーリンクとマイクルーアに向けて発射したからである。

「貴様ら！何を！」レイガン抜きながら遮蔽物に転がり込んだウインメルが叫んだ！

たちまち戦闘艦橋内で激しい銃撃戦が展開された。招集者の一人が携帯型ゼッフル粒子発生機をもっていた。そしてもう一人が携帯用のハンドグレネードランチャーを取り出して発射した・・・

カイザーリンク艦隊旗艦の戦闘艦橋で激しい爆発があった。その後艦隊全域で混乱が生じ、集団としての機能を保てなくなりつつあった。その瞬間、前方の同盟第5艦隊に向けてパニックによる全面攻撃に転じたのである。中にはいきなり小惑星帯から抜け出て逃げ出そうとした瞬間に同盟軍の攻撃で爆沈する戦艦が増えてきた・・・

「どうかしたのか？帝国軍は？」

リオ・グランデの艦橋で帝国軍艦隊の不可思議な行動をみてビュコックは考える・・・

こんな時はうちのファイフェルではなくて・・・そう、あの若いの、名前は確か・・・ヤン・ウェンリーとかいったな。あの若いのと一度話したことがある内容だな・・・

「敵が明らかにパニックによる行動を起こしたときの原因としては、？全く予期していない時期、方向、からの敵部隊の出現。？艦隊内部の人的構成要因に問題が生じた場合・・・凡そ、この2点に分けられる・・・」

出撃前の同盟軍統合作戦会議室で聞いた話を思い出していた。

「・・・とすれば、ヤン・ウェンリー大佐の論法でいけば今回はどちらなのだろうか・・・」

「提督、例のエル・ファシルの英雄ですか・・・」とファイフェル少将。

「そうだ、本来なら彼のような修羅場を経験したものをどんどん引き上げるべきなのにな・・・」

「近頃の人事ときたら・・・」

「提督！」ファイフェルが注意深くたしなめた。

「そうだな。今は戦争中だ・・・集中しよう、目の前のことにだけ」

未来のエース候補のオリビエ・ポプランとイワン・コーネフを同時に相手にしている俺は徐々に愛機ワルキューレのスペックの差が効いて来た。徐々にポプラン、コーネフの両機を追い詰めていった。ポプラン機を追い詰めてロックオンセンサーをわざとぶつけてプレッシャーをかける。

「う、こいつ！振り切れねえ！」ポプランが必死の形相で操縦桿を操作するがじりじりおれは追い詰める。あーあ、原作と変わっちゃまうな！

「あばよ！」とトリガーを引く瞬間に「！」またしても味方から無差別な砲撃が行われ、エース候補の撃墜するタイミングを逃がしてしまった。ポプランと、コーネフの両機は急いで戦線から離脱してしまい、もはや時期を逸した。

「なにやってるんだ！あいつら！」俺は怒りの炎で血液が100℃に沸騰した感じだった！丁度、俺の空戦隊のワルキューレ軍団が対艦戦闘を終えて補給に戻るところであった・・・無差別な主砲のエネルギーは無慈悲に帰還中の編隊に突き刺さった！

一瞬にして十数機のワルキューレが消滅した・・・俺は急旋回して小惑星帯に突撃した。頭が真っ白だった。敵も味方もねえあいつ等全殺しだ！物凄いGと加速感がコックピットを包む星の形が何だかよく見えないくらいの猛スピードだ！

AA、リュウ・ウェイ、ケネス・ギルフォードの機体が怒りに任せ

て突撃してきた。近距離通信で「ぎげんな!」「殺してやる!」と叫んでいた。俺は今回止めないよ。悪いのはそっちだし、今回は悪すぎる。大人の判断の前に償えるだけ償うべきだ己の生命を持って。

超高速で進む俺の進行ルート上に脱出ポッドの反応があった。軍務規定上、脱出者の保護救援は最優先事項なのである。無視するべきだ!と思ったが放置していけば間違いなく助からないだろう。

仕方なく隣接して回収作業に付いた。中には片腕を吹き飛ばされた高級士官が苦痛に顔を歪めながら載っていた。

「だ、誰か?」と誰何され、「は!第139高速機動戦隊のアルフオンス・フォン・ランズベルクであります。」「・・・ランズベルク・・・あのランズベルク家の方か・・・」どのランズベルクかは知らないが「そうであります」「具合はよろしくありませんか?至急小官のワルキューレに搭乗され、病院船までいきますので治療されたほうがよろしいかと思います」

顔面蒼白になりながら「では、頼みます」と一言だけ話し、ゆっくりワルキューレに向かった。病院船に向かう間に少しずつではあるが話を聞いて驚愕の事実を知ることになった。俺が助けた士官は艦隊旗艦の副官であるウインメル少将だった。

「サイオキシン麻薬!ですか!」

「そう、命令を無視して同盟艦隊に砲撃したのはみんなサイオキシン麻薬中毒でもだった。カイザーリンク中将はあの様子だと恐らく即死だろう。」

「やろう、味方のくせに、俺の部下を主砲で撃ちやがったな・・・」
「糞どもも同じ思いをさせてやる!」

呻きながらウインメルは「君達の動きは今回は止められないと思っているので、自身の判断で行動するように」

「了解です少将！」まもなく病院船にドッキングできた。

艦隊戦はいよいよ一方的になって来た。同盟軍第5艦隊が小惑星帯の前面に半包围の陣形で展開している。戦線を離脱するにはそこを突破するしかない。後方に（イゼルローン要塞方面ね）逃げればウランフ提督の第4艦隊が待ち構えている・・・味方同士の打ち合いもかなり目立ってきている。

「奴等は何をしているのだ？あれはどう見ても同士討ちだぞ？」ビュコックは呻いた。

「小管にも同士討ちとしか見えませんが・・・なんででしょうね」フアイフェルも考え込む。

「まあ、叩ける時に叩いておくとするか」片手を挙げてゆっくり振り下ろす「全艦、攻撃開始！」

「ミサイル、全弾発射しろ！」「撃てば何かに当たる！」

同盟軍第5艦隊の集中砲火が始まった。同士討ちを行っている両方に高密度の砲撃と水爆ミサイルが殺到した。たちまち火の玉があたりこちで吹き上がった。艦隊司令と分艦隊司令を失った帝国軍は指揮系統が機能せず、各々が自己判断で戦場を駆け巡っている状態であるので、組織的な攻撃を繰り返す同盟軍の相手では無くなっているのである。

艦隊の後方に位置していた艦艇はイゼルローン方面に脱出を試みるが既にウランフ提督の率いる第4艦隊に狙い撃ちされるのである。旗艦【磐古（Bang-Go）】でウランフ提督は戦況を見つめながら一方的な戦況に

「奴等、どういふことだ？勝手に崩れだしているぞ・・・」

同じく大スクリーンを見ている参謀長のチェン少将は「小官もわかりかねますな。何でしょうか・・・」

「わざわざ撃たれに出てくるとしか思えない感じですね」

俺は乗艦ホルツグラフで補給を行い（この段階でまだ沈んでいない！）サイオキシン麻薬中毒連中に報復するために発進した。AA、ケネス・ギルフォード、リュウ・ウェイ、グレッグ・ドレイリングの分隊も続く

既に混乱の極みの帝国軍艦隊はその数を7000隻まで減らしていた。つまりほぼ半分を失った状態である。俺たちは混乱しながら絶望的な反撃をしている艦隊の間をすり抜けて、小惑星帯の同盟方面、つまり第5艦隊の布陣している方面に飛んでいる。

未だサイオキシン麻薬軍団と帝国軍の内輪揉め状態と第5艦隊の攻撃でめちやくちやの宙域に進み、サイオキシン麻薬中毒艦を探した。近距離通信で会話するだけで興奮して発砲してくる戦艦を戦艦艦橋めがけて攻撃するのだ。

戦艦ホーブルンの戦艦艦橋に交信すると「帝国の裏切り者め！撃ち落してやる！」との内容で一斉射撃が始まったので、俺は苦笑しながら目をずっと細めて「死ね！糞ども！」と急上昇して一気に急降下を始めた。何しろ通常のワルキューレのスピードではないので対空防御システムが俺を捕らえることはできない。砲塔部分に対艦用爆弾を投下して、上昇するときに戦艦艦橋にギャトリングガンで攻撃してあげるのである。

戦艦艦橋のウィンドウ部分は粉々になり宇宙に放り出される奴等を

確認できる。撃たれた仲間の仇だ。

思い知れカスどもめ！俺たちの空戦隊は散々攻撃を繰り返し、返す刀で同盟軍の艦艇を攻撃した。そろそろ逃げないと不味いかも・・・と感じて全機集結させてホルツグラフを護衛しながら小惑星帯のイゼルローン方面に向かっていく。

当然、そこには同盟軍ウランフ提督の第4艦隊がいるのであるが・

俺たちは再度補給を済ませて残存艦隊がイゼルローン要塞へ戻るべく活路を開く役目を受けた。こういう時に踏ん張ると出世するのよね。気合入れていこう！

補給を済ませた第139高速機動戦隊が向かった小惑星帯イゼルローン方面の戦況は・・・地獄だった、半包囲の陣で構えている第4艦隊の真正面に次々と飛び出す形となっている。そこに落ち着いて狙いを定めた高密度のエネルギー弾が殺到するので、艦艇の前方エネルギーシールドなどコンマ何秒しか持たない状況であった。次々と爆沈していく帝国軍の艦艇・・・

「酷いな虐殺だな・・・」AAは呟く

「俺達で一暴れしてその隙に一隻でも多くの艦艇を脱出させなくてはならない！」俺は付け加える。

「ただし！燃料、弾薬が尽きるまでだその後はイゼルローン方面へ急いで離脱するのだ！」

「いくぞ！」30機を割った第139高速機動戦隊は第4艦隊に目がけて突撃を開始した。無補給で継続戦闘時間は1時間が良い所だろう・・・何機戻れるかな・・・

半包囲の第4艦隊の右中央部分に突然混乱が走った。艦隊運動が一瞬停止し、陣形が崩れているのである。ウランフは舌打ちしながら

「右中央部分の分艦隊は何をしている！今一息で奴らを壊滅させられるのに！」

すると「分艦隊から入電！我、敵艦載機の攻撃を受け苦戦中！以上！」

「何だと！異常に早いワルキューレに巡航艦が4隻もやられているだと！」

「それは・・・噂の蒼き流星の事ではないですか・・・あいつ一機で前回の遭遇戦では4隻の艦艇がやられたそうです・・・」チェン少将が情報端末を見ながら発言する。

「そんな化け物が出てきているのか・・・」

「敵空戦隊！我が艦隊の右中央を突破します！」

「・・・何！まずい！その後方は」とウランフが呻くと同時に

「我が方の宇宙母艦戦隊が控えているところですよ！」とチェンが青ざめる！

俺達は散々敵艦隊の一部分を集中的に痛めつけた。何故かスパルタニアンが1機も出てこないのは解せないが・・・どうやら艦隊の右中央部を通過したようだ。しかしリーダー立体地球技の前方方向にコーション・イエロー反応があった。また敵かよ。

艦影は全部で9隻、大型艦ばかりだ。かなり近づいて来たのに対空防御射撃が行われない・・・何で？肉眼で確認できるところまで来たが・・・なるほど！

「俺達はついているぜ！見ろよ！あれはスパルタニアンの宇宙母艦だ！」9隻の艦艇は我々を発見したのだろう。慌てて陣形を構築し

ようとしている。迎撃用のインターセプターも間に合わないよう出てこない。こうなれば一気に爆沈させてやるぜ！

既に25機を割っている我が戦隊だが、まだまだ弾薬も残っているはずである。急上昇後に一気に急降下を始めた。ここに来てようやく対空防御射撃が始まった。しかし宇宙母艦だけの艦隊なのでそれほど厚い弾幕も張れないので、我々は悠々と目標に近づいていった。

俺は敵の防空システムでは捕らえきれないほどのスピードと加速で次々と対艦爆弾を投下していく。スパルタニアン満載の母艦がもがき苦しむように、爆発し被害が増えていく。大型の宇宙母艦だと一隻でスパルタニアンを40機、60機くらい搭載するので被害はでかい！

既に4隻の宇宙母艦が爆沈しているさらに3隻は操舵不能状態だ。

「後方に敵艦隊！接近！」

宇宙母艦が攻撃されているので、俺達が突破して来た右中央部分の艦隊が怒りのオーラで接近してきた。小惑星帯に潜んでいた帝国軍残存艦隊は前方の同盟軍艦隊に混乱が見られたのと同時に全速力で飛び出した。宇宙を真上から見ると半包囲の右中央部分が後ろに引っ込みそれと同じくして前方から艦隊が飛び出している、まるで吸い寄せられるように進んでいる状態であった！

宇宙母艦をほぼ壊滅させた俺達の後方に同盟軍の右中央部艦隊、そしてその後ろに我々の帝国軍の残存艦隊6000隻が追撃している状況である。

同盟軍艦隊に一斉射撃を行っている帝国軍残存艦隊に痛撃を浴びている同盟軍はあっという間に殲滅してしまった。

旗艦旗艦【磬古（Bang-Goo）】のメインスクリーンでウランフは絶句していた。

「・・・9分9厘、勝ちなんだぞ・・・間違いなく勝ち戦だったのに・・・」軍用ブーツで地団駄を踏んだ！

「大勝利目前で我々は虎の子の宇宙母艦を9隻全部失ったのか・・・500機のスパルタニアンといっしょに・・・500名のパイロットもろとも・・・」

チェン参謀長は声がかけれなかった。しかしウランフの言うとおり、9分9厘我々の大勝利だったのに、あの蒼き流星のワルキューレ戦隊だ、あいつらのせいでこんなに打ちのめされなくてはならないのか・・・

ホルツグラフに帰還した我々は誰一人としてイゼルローン要塞に戻るまでコックピットから出てこなかった・・・みんな限界を超えて戦ったので気絶？眠り？の最中だった。

第2次ナイメーヘン～アルレスハイム星域会戦…銀河帝国軍13000隻が参加し、イゼルローン要塞内のドックに戻ってこれた数は6200隻。同盟軍第4、第5艦隊参加艦艇数28000隻で損失数20000隻。

同盟軍の大勝利である。

イゼルローン要塞立ち寄りの後、帝都オーデインで上級士官学校に戻った俺は少佐に昇進した。分艦隊と1個空戦隊を預かる立場となった。あの金髪赤毛コンビも史実どおりに順調に進んで来ているの

で俺は全てを先取りしてやることにした。先にあいつに会って・・・
先にあそこに行って・・・先に奴を倒して・・・

第七話…迎撃！惑星カプチェランカ攻防戦

第七話…迎撃！惑星カプチェランカ攻防戦

少佐になった俺は分艦隊司令官として20隻の艦隊と50機のワルキューレ空戦隊を預かる身となった。旗艦となる高速戦艦【コーラル・シー】は機動性重視（スピード重視型）の戦艦でサイズは帝国軍の大佐、少将が乗艦するワレンコフモデル標準戦艦よりも小型でかつ、エンジン構造は新型のトルネードチャージ型ラムエンジン搭載のルクシオン型2号艦ということでスピードとパワーは現行型よりも60%以上のアップが実現できている。

航海士に言わせると幼児の三輪車にワルキューレのエンジンを載せた感じ・・・だそうだ。ピカピカのうれしい話はここまでで、艦隊の構成内容は酷いもので、戦艦6隻、巡洋戦艦3隻、高速巡航艦6隻、駆逐艦3隻、ミサイルフリーゲート艦2隻である。

バランス型と言えなくも無いが、不満点がいくつもある！

？ 宇宙母艦が無いこと・・・これではワルキューレの積極活用が難しい事。今後は対艦戦闘はワルキューレの時代になると信じているのでこれは不満。

？ 航空戦力が無い以上、接近戦ではなく砲雷撃戦主体の構成であるべきなのに長距離射程を持つ戦艦、高速で雷撃を行う巡洋戦艦の数が少ない事。これでは敵のスパルタニアンに接近してしまう可能性が高い・・・これも不満。

？ 一番使うのが難しいと考えている駆逐艦とミサイルフリーゲート艦をどう使えばいいのか、射程が短い戦闘艦なので前面に出すしかないが、当然敵の攻撃を受ける機会が増えてしまう、装甲が薄いので被害が大きくなってしまう・・・これは不安。

？ 何が不満で、あの！ホルツグラフが編入されていること！俺のコーラル・シーから見たら3世代古い戦艦である。そんな艦船を入れていたら、自慢の高速戦闘が出来なくなる！不沈伝説はもういいから、俺はスピードが命なのだから。

以上の理由で俺の分艦隊は些か不満な内容である。

コーラル・シーの艦長に任命されたザザ・パチュリア少佐にいわせると、未だましな方なのだそうだ。

艦隊運用参謀にはギュンター・ノルト大尉、作战参謀にはユーリー・クルガン大尉、二人とも我がランズベルク家の領内の出身である・・・ということにしてある。アルマリック・アスヴァールAA、ケネス・ギルフォード、リュウ・ウェイ・・・みんな領内出身の士官という形にしてあるが、訳あり登用なのである。経緯は非常に重要なので機会を改めるが・・・

ちなみに我が栄光の第139高速機動戦隊は現在アルマリック・アスヴァール大尉が引き継いでいる。

所属艦隊はイゼルローン要塞駐留艦隊司令ゼークト大将所属のウィンメル艦隊（元はカイザーリンク大将の艦隊を再分割し900隻ほどの分艦隊になっている）に配属されている。

現在、ウィンメル少将は前回の戦闘で負傷し療養中であるので、副

官のサマーン大佐から俺も含めた分艦隊司令官に命令が下った。

「イゼルローン要塞駐留寒帯司令のゼークト大将から命令がでた、我が艦隊は早速出撃準備を整え、惑星カプチェランカ星域に向かう。」

「今回の出撃の目的は？」

「カプチェランカ星で精製した水素エネルギー、天然ガスを積んで出航する輸送船団のイゼルローン回廊内までの護衛任務である。」

「同盟軍の動きは今のところ情報局、フェザーン航空宇宙局ともに入っていない」

「三日後の18時を持ってイゼルローンを出発する！以上！」

俺は分艦隊に戻り、作戦を説明した。正直、楽勝！どうでもいい任務だ！と思っていた。

準備OKで出撃をした。総勢4500隻の艦隊である。

カプチェランカ星までは通常航行で5日間の航程である。行きはワープも使うので3日間で到着予定である。道中で馬鹿兄のアルフレッドから電子メールが届いていた。それによると最近、またあの糞フリーゲルとつるんでいるらしい・・・フリーゲルめ何を考えているのか。

ああ、それと少しずつ人材確保のための予算が取れるようになったので、フェザーンに諜報部員を一人送り込んだ。アンドレイ・キリレンコという者で軍属でないために階級はない。金髪&赤毛コンビを出し抜くために採用した。何しろ歴史上、初めてフェザーン回廊を通過するのは俺で無ければならないので・・・

カプチュランカ星に到着してすぐに俺はワルキューレと駆逐艦のコンビネーションで域内探索を実行した。何しろ運ぶ物が物だけに慎重にならないとまずいのである。熱源探知ユニットを5000個展開させて、コーション・レーダーを100個撒き、敵襲に備えた。

資源輸送艦と言うものを始めてみたが、その巨大さに驚いた。俺のコーラル・シーは全長600メートルであるがどう見ても輸送タンクを装着した状態での輸送艦のサイズは2000メートル以上あるのではないだろうか・・・こんなデカイ物を作るのか・・・その巨大なタンクを5本まとめて抱え込む形で一隻の輸送艦はできている。

全ての輸送艦がカプチュランカを離脱できるまで後、2日かかるらしい、今、輸送艦隊司令から連絡があった。上級士官学校に戻れば秋の体育祭かあ・・・練習してないけど大丈夫だよなあ・・・むかつく先輩どもを思い知らせてやるには良いチャンスだし・・・

幼年兵がコーヒーを持ってきた。みんなにわたして俺も一口飲んだのだが・・・

「んー、何だ！この酸っぱいコーヒーは！」「うげ！」とあちこちで騒ぎ出した。

「でも、司令、この袋の豆を淹れたんですよ！」

その幼年兵が持ち上げたコーヒー豆の袋には『フレンチ・ロースト』と書いてある。

「フレンチ・ローストだど？これがフレンチ・ロースト!？」

「ああ、オーディンのカフェが懐かしい・・・クロワッサンも食いたい・・・」

と故郷を懐かしんでいるときに！

航海士が

「コーション・センサーに感！」

「前方2万宇宙キロに重力震！ワープアウトの数凡そ10000！」

「何だと！」俺はフレンチ・ローストを噴出して、モニターを見た。

こんなときに恐らく敵襲である。

次々とワープアウトし、現れた同盟軍艦隊は明らかにカプチェランカ星の天然・鉱物資源を狙いに來たのだろう。

「敵旗艦艦影はパエッタ中将のパトロクロス！同盟軍第2艦隊であると推定します。数は11000隻です。」

「何てこった！こちらのほぼ3倍だぞ！」サマーン大佐は呻く。

「現在離脱可能な宙域にいる輸送艦は！」

「は！140隻ほどあります！」

「く、ほぼ半数か・・・どうする・・・」一瞬悩んだが、すぐに決断した

「発進可能な輸送艦は全速力でイゼルローンに向かわせろ！間に合わない艦はそのまま作業継続し、残留する護衛艦隊とともに離脱を試みる！」身勝手な決断である。しかし全滅を回避するための決断と言えば聞こえはよいが・・・

「クロフォード少将とバリヤー二少将を！」サマーンは分艦隊の司

令官を呼び出した。

「卿らは残って残存艦隊をイゼルローンにつれて来い！よいな！」

言われたほうは堪ったもんじゃない！2人の少将クロフォードとバリヤーニは青くなって反論した。

「し、しかし！残存部隊を護衛するのは命令としても、いかほど戦力をお預けいただけるのでしょうか？」

「・・・1000隻がいいところだろう・・・奮闘を期待する！」
苦し紛れにサマーンは説明する。

「そ、そんな！」後の言葉が続かない2人の司令は絶望的な表情で通信を切った・・・

「俺達に死んで来い！ってのか！」「何考えてやがる！うちの司令は」お互いが自分自身を納得させるためにサマーンを罵っていた。そして落ち着いて考えた結果は2人別々のものになったのである。

「俺達に残った輸送船団を護衛しろってさ・・・」コーラル・シーの戦艦艦橋で俺は命令を受け取った。すぐに、ノルト、クルガン、両参謀に相談した。

「こういう場合の考え方として、まわりの脳なしどもはどう考えるかな？」

「恐らく嘆くばかりではないかと・・・」ノルトは答える。

「敵前逃亡を図るものまでおりましょう。」クルガンは顔をしかめつつ答える。

「やっぱ、目立つチャンスだよね！これって！」と俺は目を輝かせ

ていた！

「司令がそうお考えなら、その通りかと・・・」ノルトは答える。

何が起きても輸送船団を守ればOKなわけだから・・・先に逃げ出す艦隊どもに役立ってもらうとするか！と俺は考えている。これってエルファシルの脱出と同じ感じ？史実を知ってるって役に立つなあ・・・

俺はクルガンに熱源デコイとミノフスキーチャフを準備させた。きつとこれが上手くいくはずである。その話をしたときに

「小官も同じ考えでした。」と説明してくれた。やはり、この手しかないだろうな・・・

サマーン率いる護衛艦隊は正面の同盟軍第2艦隊に攻撃を開始した。帝国軍3800隻対同盟軍11000隻の戦闘である。あつという間に形勢が不利になり後退をはじめるサマーン。

追激戦に入った同盟軍の進行方向の逆にワルキューレで引っ張ったダミー6000個に1000個の熱源デコイと数10万枚のミノフスキーチャフをばら撒きながら全速力で進んだ。

「何！数万隻の集団だと？」同盟軍第2艦隊のパエッタ中将は叫んだ！

「そんなはずはありません。これは罠です。正面の敵艦隊もしくは今のリーダーに映っている集団の逆方向から本体が出てくるかもしれない！」「今、出て行っっては駄目です！」幕僚の一人が答えた。

「何だと、君は、この部隊が罠でその後に本体が出てくるというのか！」「つまり、それ以上の数がまだこの惑星に残っていると

のか！ヤン・ウェンリー少佐！」

「今以上なのかどうかは判断しかねますが・・・少なくとも自分ならそうします。」・・・言わなきゃよかったかな・・・別にこちらが負けるわけではないのだから。余計なことだったな。ああ、下手打ってしまった。ヤンは後悔しながらさらに考えた。

「困なら仕上げに多少の攻撃姿勢を見せるべきだが・・・」

「新たな艦隊方向から巨大な飛行物体がこちらに向かってきます！数40！」

「巨大な物体とは何か？正確なところを報告せよ！」と顔をしかめてパエッタが言った。

レーダー管制官は

「は！・・・しかし、この質量は・・・戦艦クラスの物ではありません！・・・何と言うかその、小惑星がそのまま向かってきているような質量です。！」

「なるほど・・・うまいな・・・」ヤンは一人で感心した。

攻撃姿勢を見せることで注意を引き付けられる。しかも恐らく向かってくるのは小惑星にエンジンを付けたものだろう。当たらなくても殆ど問題ないし1隻でも当たればそれは大きい戦果になるし、攻撃の意図が明確になると思わせられる・・・

「どっちに転んでも損しないわけだ。」ヤンは独り言をつぶやく。「接近中の物体が判明・・・小惑星です。小惑星が此方に向かってきます！」

「全艦回避しろ！」パエッタは叫ぶ

「俺なら今脱出するな・・・」

レーダー管制官が

「レーダーに感！第三の方向に飛行物体数凡そ1000！」

やはりな・・・敵にもこの宙域の状況を見渡せる者がいるんだ・・・中々どうして！ヤンは感心していた。銀河帝国の貴族にも優秀な奴はいるわけだ。

「1000！やはりな、それは艦隊ではなく小惑星群か何かだろう。」
「そもそも1000隻の船を脱出させるために数万隻の艦隊を囷にするわけが無いだろうが！」ヤンに聞こえるようにパエッタは言う。

俺が使った囷の中から発射された小惑星は衛星ミサイルと言われて
いるもので、構造は単純である。

小惑星にエンジンをつけて方向を決めて発射するだけのものである。

途中でエンジンが止まっても慣性の法則でそのまま進み続けるし原料が小惑星なのでコストは殆どかからないし、1発でも命中すれば大成功だし・・・

「回避間に合いません！衝突します！」2発の衛星ミサイルを避けきれずに同盟軍艦艇の中で8隻が爆沈した。まさにキルレシオが高くつく被害だ。

「何をしているか！」パエッタは怒鳴る。

「陣形を立て直せ、正面から攻撃を行う！」

「最初の船団が有効射程より離脱しつつあります！」管制官が報告すると、パエッタも

「構うな！正面の本体にのみ集中しろ！」「紡錘陣形だ！」

アルフォンスの仕掛けたペテンにまんまと乗せられ、同盟艦隊は採取に逃げ出したサマーン艦隊も見逃すことになった。まさに1回で2度おいしい作戦になってしまった。

前方の艦隊が脱出を止め、宙域に留まった。これは引っ張っているワルキューレも逃げ出したせいである。それをパエッタの艦隊は陣形を構築していると勝手に判断しているのである。

ベレー帽を深く下げて腕を頭の後ろに組んで壁にたたずんでいるヤンは同じ艦隊にいる後輩のダスティー・アッテンボローに話しかけられた。

「また、パエッタ司令に言われたんですって？」

ヤンは「ああ、別にもういいよ。この戦いは我々が小惑星にぶつけられた8隻の艦以外の被害はもう、でないだろうからね・・・」

「ええ！どういふことですか？」アッテンボローは聞き返す。

「つまりこういうことさ、前方の敵艦隊と思われるものは恐らく囚だ、艦隊でもなんでもないと思う。我々は乗せられたのさ。」

「それでは何故、転進してそれを！」ヤンはアッテンボローの話を途中で切った。

「パエッタ司令だって自分の過ちを認めたくは無いだろう？これはもはや、余計な事だ。」

「敵はズいぶん陣形編成に時間がかかっているな。素人か!」「本当の艦隊戦を教えてやるぞ!」

「待っている必要は無い!全艦攻撃開始!」パエッタが命令した。

同盟軍艦隊は忠実に命令を遂行した。四が浮遊している宙域に攻撃は殺到した。集団を構成しているのは熱源を発するデコイとチャフ（1枚が4メートル四方のアルミ箔）の集団である。主砲一撃で数十個から数百個のデコイとチャフ・アルミ箔が蒸発してしまう。

「一撃で2000隻の敵が消滅した?・・・」パエッタは耳を疑った
「そんなはずは・・・」一瞬、パエッタはベレー帽を深く降ろしているヤンのほうをちらりと見た。

「再度、砲撃せよ!一気に突き崩せ!」

同盟軍第2艦隊は再び四が浮遊している宙域に殺到した。主砲エネルギーで蒸発する熱源デコイとチャフたち。

「しまった!凶られた!」パエッタ中将は青くなった・・・（奴の言うとおりであったじゃないか・・・）

何としてでも手柄を立てなければ!強迫観念に包み込まれたパエッタは

「追撃可能な艦隊はどっちだ!」と管制官に探させる。その時にヤンはベレー帽を掴み、

「司令、もう遅いです。追撃は危険です!」と叫んだ!じろりと脅すような目つきでヤンを睨みつけ、

「どうやら我が艦隊は敵に欺かれたようだ。だとすれば転進してこれを撃たなければなるまい。」

「敵艦隊は発進して我々の追撃戦に対する備えを準備する時間を与

えてしまいました。この上は、不本意ながら至急撤退すべきであると判断します。」ヤンは訴える。

「ふむ、何とも不愉快な作戦案だな、ヤン・ウェンリー少佐、だが、空手で帰るわけにはいかん！」

「最も早く追撃可能な艦隊は最後に発進した艦隊です」管制官が報告した。

「よし、紡錘陣形のまま突撃せよ！」パエツタは命令した！

（私なら、あの小惑星を再び正面にぶつけるな・・・そしてワルキューレで出鼻をくじいて離脱する）

ヤンは無言でスクリーンを見つめていた。

俺はコーラル・シーの戦闘艦橋で

「奴ら、予想通りに追いかけてきたぞ！鼻っ面を引っ叩いてやれ！衛星ミサイルだ！全弾発射！」

「その直後にワルキューレ戦隊だ！AAに命令せよ！」

「クロフォード少将、バリエーニ少将、今ですよ！艦隊はイゼルローンへ急行させてください！」

「りよ、了解した。卿はそれでいいんだな？」

クロフォードとバリエーニの引きつった顔がスクリーンから消えた。

最大戦速で紡錘陣形のまま突撃してくる第2艦隊に左右斜め前方から最後の衛星ミサイル20発が発射された。前回に痛い目にあっているのも、慌てて回避運動に入るが紡錘陣形の中心部の艦艇は思うように方向転換が出来ないまま衛星ミサイルが突入してきた。外側の艦艇も大きく陣形を崩してしまい、右往左往しているところにA

・アスバール

アルマリック

A率いるワルキューレ空戦隊が襲い掛かる。

「いけ！周りは全部敵だ！帰艦時に残弾残すなよ！全部！ぶち込んでやれ！」とAAは命令した。

ワルキューレは単艦で応戦している艦艇に集中攻撃を浴びせた。

「アルフォンスは初陣で4隻撃沈か・・・俺も負けてられないね。これで食ってるんだから。」

アルマリック・アスバールは冷静に巡航艦の戦闘艦橋に対艦ミサイルを発射した。艦隊の外周部で次々とワルキューレの餌食になる同盟軍艦隊にパエッタは

「何をしている！こちらもスパルタニアンを出せ！急いで陣形を再編しろ！」と叫ぶ

（全てが遅くこちらの予想通りだ。銀河帝国軍艦隊の司令官は原理原則に則り攻撃してくる。）

「逆に見事だな！ってことか」独り言をつぶやくヤン・ウエンリーは光の玉が弾ける同盟軍艦隊外周部分をスクリーンで見ている。

「あの艦隊の司令官・・・誰なんだろうか・・・」ヤンはアッテンボローに問い、

「さあ、きっとそれほど高い地位についていないと思いますけどね」と答える。

同盟軍第2艦隊は衛星ミサイルとワルキューレの奇襲により80隻を失ってしまった。

銀河帝国軍被害はほぼゼロである。

イゼルローンに戻った俺には輸送艦隊の司令から挨拶を受けた。（あんたみたいな戦艦乗りは始めてみたよ！今までの奴らときたら・・・）

結局俺の陽動作戦で輸送船団雄被害ゼロ。損失した艦艇ゼロ、ワルキューレ全機帰艦を確認。分艦隊で同盟の1個艦隊を手玉に取ったというニュースが超高速通信^{ハイパーウェーブ}で銀河帝国中に知らされた。

これでまた出世しちゃうかもなあ・・・次は何だろ一氣に少将とかにならないかなあゝ金髪&赤毛コンビの前にやらなければならぬ事がありすぎて・・・急がなくては！

第八話：割込み御免！シャフハウゼン子爵家VSヘルクスハイマー伯爵家

第八話…割込み御免！シャフハウゼン子爵家VSヘルクスハイマー伯爵家

それは同盟軍のイゼルローン要塞攻略戦のような派手な艦隊戦でもなく、銀河帝国の自由惑星同盟領への侵攻でもない。

ひたすら後ろめたい、みつともない、大人気ない、チンピラ貴族の口論から始まった。

ヘルクスハイマー伯爵家が（大貴族のリッテンハイム家の分家というか子分みたいな感じ）シャフハウゼン領にあるレアメタルの採掘場である（我がランズベルク家の発掘量の500分の1だけどね・・
・）モンブラン山脈を何とか難癖付けて？ぎ取ろうとしているのである。

その理由が上級士官学校にいるそれぞれの子息同士のいざこざで、親が登場し政治的決着をつけようとしているなかでの話であり、正直、子供の喧嘩に親出すな！って感じかな。

シャフハウゼン家の子息オスロマイヤーは上級士官学校で俺と仲良しの一人だ。（俺は別に全ての貴族が憎たらしいとは思っていない。問題がある連中もいるが、そうで無いやつもいることを理解している。そこは原作のラインハルトやキルヒアイスとは違うところである。）フルネームが出る以上、この話以降は俺の幕僚に加わる訳だけどね。

気が弱く運動神経も殆ど無いが、艦隊運用シュミレーションを昼休

みに対戦したとき、かなり上級と言われていた俺を10分で倒してしまった。

正直、馬鹿貴族に何かを負けるなんてことを考えていなかった俺はショックだった。ただ、奴は優秀な頭脳を持っていた。

テキスト類は一回読めばほぼ覚えてしまうという頭脳・・・頭にくるけど、むしろおれの忠実な手足として使ってやるほうが銀河帝国のために有意義だ。

そんな下心もあり、公私に亘り色々話し合っている仲だ。そんな彼、オスロマイヤーが「ヘルクスハイマー家にイチャモンを吹っかけられてる!」と聞いたときに我がランズベルク家の誇る超近代化精鋭部隊を送りこんでこの2家とも併吞してしまう手はないかと考えたくらいである。

まあ、ヘルクスハイマー家なんて我がランズベルク家にしてみれば片手間で踏み潰せる貴族レベルだけだね。家自慢をもう少しすると、我がランズベルク家は4つ目の惑星開拓を完了し資産は莫大な数字になっている。もちろん非公開だけどね。

ランズベルク私兵団は艦隊20000隻、ワルキューレ2000機を所有している。俺は最終的に艦隊10万隻ワルキューレを5万機所有することが目標であると報告している。

惑星開拓も進めなければならぬし、有能な士官を領内から発掘しなければならぬので忙しいのである。

そんな中、ヘルクスハイマー家が艦隊を発進させてシャフハウゼン領内に侵攻しつつあると報告を受け、俺は馬鹿兄アルフレッドに従

えランズベルク家の艦隊を急行させた。急いなので高速巡航艦が中心であるが・・・ヘルクスハイマー家の艦隊なんてたかが300隻である。

旗艦コーラル・シーの戦闘艦橋内で俺は

「楽勝なのはわかってるが・・・」呟いた。

「この際、難癖つけてヘルクスハイマー家を取り潰してしまい、併呑したい。」

「鍵はこのコーラル・シーですか？」とギョンター・ノルトが聞いてきた。こいつはいつも俺の知力と集中力を試す質問ばかりしてくる・・・

「ああ、そのとおりだ。この分艦隊旗艦のコーラル・シーが切り札だ」

「直前の情報によると、シャフハウゼン家の領主がグリューネワルト伯爵夫人へお願いをして例のラインハルトフォンミューゼル大尉が軍事顧問として赴任してきているそうです。」

「ふむ」

「そうきたか・・・だが、少なくとも味方であるので気を使う必要も無いであろう。」

俺は戦闘環境から主砲の砲塔を見下ろしていた。新型ブラスター装備の超強力なやつだ・・・恐らくこのブラスターを装備している艦は銀河帝国数ある軍艦の中でこのコーラル・シーくらいであろう。

「司令、まもなくシャフハウゼン家の領内に接近します。」管制官が報告してくる。

「スクリーンで見れるかな？」俺は司令官席をたちメインスクリーンを見上げた。

「は、切り替えます」メインスクリーンにはまばらな光点がパラパラと見られる。一応、交戦中なのであろう。何だかつまらなそうな艦隊戦だね・・・

「ヘルクスハイマー家の艦隊が約320隻、シャフハウゼン家が凡そ190隻です。」

弱小貴族にしては良く集めた軍備である。我々ランズベルク家私兵高速集団は9000隻である。

戦闘を行えば一瞬で終わってしまう。

だからこそ、1隻も失いたくないのである。俺の考えているXdayまではね・・・

お互いに戦闘では素人集団なので攻撃も効果なく、まばらだし、まぐれで命中して破損するくらいだろうか・・・ダメな奴らだね。

「司令の言われる・・・オスロマイヤー卿でしたでしょうか？・・・あんまり戦果を挙げてはいないようですが・・・」ギウンター・ノルトが皮肉る。

「自転車の補助輪なしで乗れるようになったからといって、ワルキユーレを操縦できないから無能だという内容の発言は・・・避けたいものだね。」俺は答える

「御意」ノルトは再びメインスクリーンを見つめる。

「司令、そろそろ干渉宙域に入りますが、ミノフスキー粒子の濃度が濃くて通信が出来ません。」管制官が報告する。

「A Aに命令、ワルキューレの発進準備をするように」俺は管制官に指示すると

「アスヴァール大尉からです」と管制官

「すでにワルキューレは準備を10宇宙時間前に完了しております。まるで、指示が遅いよ!と言っているようだ・・・」

「対艦戦闘のみの爆装で出るように!」と俺は確認をした。

「御意でございます。司令官閣下殿・・・」スクリーンは切れた。全く舐めてるべ俺のことを。原作どおり食えない奴だよな。

「ケネス・ギルフォード大尉を」俺は続けて指示した。今回ケネス・ギルフォードには複座式戦略攻撃機ドーンコメット隊を率いてもらうのだ。

「司令、ギルフォード大尉です。」スクリーンに敬礼しているギルフォードが出た。

「司令、何か?」

「うん、先発隊のワルキューレが全機発進後にギルフォード大尉のドーンコメット隊は大きく迂回して天頂付近から攻撃を行ってもらう。」

「は!」「しかし司令、ドーンコメットの半数を残してしかも雷撃装備で待機の機体はどうされるのですか?」

「状況次第で自分が出る!そのために準備してあるのだ」と答えた「・・・蒼き流星がわざわざ、出るのですか・・・」ギルフォード

は驚いていた。

「まあ、それも相手の出方次第だけだね。」俺は近づく戦場をスクリーンで見ながら答えた。

「司令、通信可能エリアまで後400宇宙秒です」

「うむ、通信回線を此方に回せ」「最大戦速でコーラル・シーは戦闘エリアのど真ん中に位置しろ！」メインスクリーンに映る二人の貴族に俺は話し始めた。

「これよりアルフォンス・フォン・ランズベルクが仲裁目的のために中央に進軍する。小官の乗艦コーラル・シーは皇帝陛下より賜った新造艦である。そのために万一、当艦にどちらかもしくは両方からの攻撃で被弾するようなことがあれば、それは皇帝陛下にたいする反逆行為とみなし即時攻撃を開始する。」

「その場合は被害の内容を考慮する事無く、全軍に殲滅戦を指示するものである。」かなり強引な一方的な説明であるが、それではなくては目的が果たせない。どちらかをもしくは両方の家を併呑するためには・・・

俺の乗艦コーラル・シーだけどんどん進んでいく・・・

シャフハウゼン家の艦隊とヘルクスハイマー家の艦隊の中央に進み停止した。

それまでの砲撃戦とは打って変わり、静寂が流れているのである。流星のギューンター・ノルトとユーリー・クルガンも汗をかいている。両方から一斉射撃を受ければ瞬間的に蒸発してしまう距離である。

俺はわかっていた。恐らく手を出してくるのは・・・ヘルクスハイ

マー家であることを。

ヘルクスハイマー家艦隊の旗艦では原因の一人であるご子息殿が怒り狂っていた。

「なぜあのようなものの話を受け入れなければならないのか！」参謀格の者が押さえつけながら

「アルフォンス閣下の話は原理原則に則っており、ここで手を出せば間違いなく反逆罪で抹殺されます。しかもアルフォンス貴下の艦隊は非常に強力であるとの話も伺っております！何卒、ご自重を！」

同じころ、我がコーラル・シーにシャフハウゼン家の艦隊から使者が来た。

ワルキューレから降りてきたのは何と、ジークフリード・キルヒアイスであった。

「キルヒアイス中尉、久しぶりですね。」俺はあの暑く長い王宮杯争奪耐久レースを思い出した。

「その節は、本当にありがとうございました。」と深々と頭を下げるキルヒアイス。

おっと、まずは恭順して相手の懐へ入るか・・・定石どおりの展開か・・・次はどう来る？

「本日、伺いましたのは、シャフハウゼン家の艦隊参謀役であるラインハルト・フォン・ミューゼル大尉の伝言をお伝えに参りました。」丁寧に話すキルヒアイス・・・こいつを俺の幕僚に必ず加えてみせる！

「ほう、どのような話でありましょうか？」俺もできるだけ丁寧に

話し返した。

「アルフォンス少佐の御身をわざわざ煩わすことなく、小官の方で解決する所存ですので、どうか今件は雄引き取りくださいますようにとのラインハルト大尉の申し出でございます。」

やはりな・・・この金髪&赤毛コンビは利益ではなく出世のステツプとして今回の騒動を利用しようとしているわけだ・・・こっちはバリバリ利益のためだけだね。

「なるほど、ラインハルト大尉の申し出も大変よくわかります。小職の身を案じてのご意見であるかと思われます。」と切り出しながら「ただ、少官も盟友でもある、オスロマイヤーフォンシャフハウゼン殿より正式に援助の申し出を受けているの事は事実であるので、役目を全うしようと思っている。」

「今回は敵味方ではないので、各々感じられるままに、そしてできれば邪魔をすることがないようにしていきたいと思うとラインハルト大尉に伝えていただけませんか？」

お互いの思惑を感じているキルヒアイスは暫く眼を伏せて

「わかりました。少佐のお考えはごもっともであると少官も判断します。それでは我々もアルフォンス少佐の邪魔をしないようにいたしますので」

「ああ、キルヒアイス中尉・・・」敬礼とともに立ち去ろうとするキルヒアイスを俺は呼び止めてしまった。

「は！何でありますでしょうか？」振り返り俺を見つめるキルヒアイス。

「い、いや、何でも無いです。またお会いしましょう！」

「は！」と敬礼し立ち去るキルヒアイス・・・

「少佐は彼を幕僚に加えるおつもりですね。」ギンター・ノルトが言った。

「ああ、できれば欲しい人材の一人だからね。未だ貴族の間では金髪の小僧の周りを回っている赤毛の衛星だと言われているが彼は本物だと思う。」

「だから欲しいんだ。本物をさ・・・全てが始まる前にね。」

一方、怒りの収まらないヘルクスハイマー家艦隊の旗艦では、爆発寸前であった。

「こうなったら邪魔立てするほうが悪いのだ。全艦、あのコーラル・シーへ砲撃を開始せよ！」と完全に逆上した、ご子息殿が命令した。「御曹司！それはなりません！」「またも参謀格の者がおさえにかか

るが
「貴様！私はリッテンハイム家に繋がっている者だぞ！あんなランズベルク家など踏み潰していただくわ！」「構わん！砲撃開始せよ！」

「御曹司！いけません！」ここで必死に止める参謀格のものはラッセル・ウェストブルックという少尉級のものである。（フルネームが出ると言うことは・・・幕僚になっちゃうかも・・・）

「貴様！もうよいわ！警備兵！こ奴は頭がおかしい！病院船に連れ

て行ってしまえ！」彼、ウェストブルックとしてはここが生死の分かれ道であった・・・

ヘルクスハイマー家艦隊の旗艦の主砲が発射され、コーラル・シーへ向かう。

「前方、高熱源体！」「ヘルクスハイマー家艦隊の旗艦から発射された模様！」

俺は心の中でやったぜ！とガッツポーズであった。

発射された主砲の1発がコーラル・シーの第一砲塔付近の装甲版に直撃した。

「全艦！被害状況！」「第一砲塔、異常なし！」慌ただしくオペレーターが叫ぶ！

「これも予定通りですかね」ギンター・ノルトが言うとユーリー・クルガンは渋い表情で胸の前で十字を切った。

「第一砲塔付近第一装甲版破損。負傷者6名、死亡なし」最終的な被害状況が確認された。

ほんの数秒間、宇宙は凍りついたような沈黙があった・・・

「よし、もういいだろう。ブラスター全弾発射しろ！目標は旗艦のみだ！それでOKだろうからな！」

我がコーラル・シーのブラスター砲塔は全部で6個、一斉にヘルクスハイマー家艦隊旗艦に向けて測的が始まった。ロックオンした砲塔から物凄い光とともにブラスターが発射されていく。

ブラスタ―の弾速があまりにも速いので爆発しないで直撃した部分だけがもぎ取られていく。前方部分から順番にもぎ取られて戦闘艦橋に近づいていくブラスタ―の着弾を見て

「何故だ！私はリッテンハイム家に繋がっているのだぞ！何故こんな・・・」全部叫びきる前にブラスタ―が戦闘艦橋を直撃した。内部の乗員は全員蒸発してしまった。

「ヘルクスハイマー家艦隊から入電」「我に戦闘継続の意思なし、寛大な処置を願う」との内容だった。俺はヘルクスハイマー家艦隊を傘下に収めた。そして進路をヘルクスハイマー家本星に向けた。

感謝の意を表しにオスロマイヤー・フォン・シャフハウゼンが乗艦してきた。

「礼よりも私としても優秀な副官が一人でも多く欲しいのだ、卿の力を貸して欲しい」

「何をお考えなのですか？アルフォンス少佐は、これだけの名声を得ながら未だ何かを欲しておられるのですか？」

「それは貴族のあり方については、考えるところはあるが、今は自由惑星同盟を滅ぼすことにある！」などと心にも無いことを話してしまった。

俺のそばにいればいずれわかる事だから・・・

進路をヘルクスハイマー家本星に向けてから既に18宇宙時間が過ぎ、直接ヘルクスハイマー家に対して降服勧告を行った。一応、財産は保障。だが今後の内政は6割を人々利益とし、4割を租税とす

る。うち2割は福祉、教育関連への投資とする、ランズベルク家モデルを導入した。

残る2割の半分をランズベルク家の安全保障税とした。それくらいで我々は十分なのである。欲しいのは在野の人材であるのだから・

・

ノイエサンスーシには報告も完了し、正式にヘルクスハイマー家は我がランズベルク家の下部貴族に組み込まれた。これで我がランズベルク家は惑星6個を所有し人口が6億人を突破した。

今回は対自由惑星同盟への作戦ではないので俺や仲間の昇進は無かったが、待望のオスロマイヤー・フォン・シャフハウゼンが少尉として正式に俺の軍門に参加することになった。

まだまだだぜ、どんどん人材も集めて資源を増やして資産を倍増させて、ブラウンシュバイクだの、リッテンハイムだのを叩き潰すのだ。そして最後は皇帝にも・・・

金髪&赤毛コンビが追いつく前に作戦を実行するのだ・・・

何を？って決まっているじゃないか。神々の黄昏作戦だよ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0169y/>

銀河迷雄伝説

2011年11月25日17時26分発行